
Chaos Soldier - 人修羅物語 -

六堂 修羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Chaos Soldier - 人修羅物語 -

【Nコード】

N6447X

【作者名】

六堂 修羅

【あらすじ】

巷では札付きの暴れん坊の青年、三池新一。

夢の中で青い扉を開けた彼は、言葉も通じない異世界に迷い込んでしまった。

そして、アヴァロン帝国第14皇女リミアに救われた彼は、彼女から言葉や世界の常識を教わる。

そして、1年の時が過ぎ、新一は冒険者となり、アヴァロン帝国の皇位継承に関わる陰謀に巻き込まれて行く…

完全オリジナルのファンタジー小説です。

化け物じみた怪力を持つ青年がファンタジー世界で大暴れする小説にする予定です。

全然プロットが立ってなくて思い付きだけで始めた小説なので、今後どうなるかもわからないですし、執筆速度も遅いと思います。

（他の2本も全然終わりませんしねえ。特にサバイバー）

そのあたりはご容赦ください。

第1章・俺はただ普通に生きたいだけだ！（1）

ここは深い森の中。深い山の中。

ここ1年で見慣れた、子供の頃は見たこともない植物達が生い茂る森を一人の男が歩く。

額に張り付く汗を、鬱陶しそうに左手で拭い捨てながら。

男の名は三池新一。ミイケ・シンイチ

脱色した金に近い短髪。顔立ちは整っているが、凶暴そうな三白眼と面構えが他者を寄せ付けない雰囲気放っていた。

年は今年で23歳。身長は180cmを超えてる。ガタイはいい方であるが、プロレスラーの様というほどではない。

身に纏うのは、ライダーのような黒いレザーファッション。服の内側には金属製の輪が縫いこまれている。そして、額には銀色の鉢金を巻いている。これが彼の鎧なのだ。

他に持つのは、背中に麻布製の小型のリュックと腰に大型ナイフと小型ナイフをそれぞれ一本。皮製のベルトポーチを一つ。

そして、道路標識ほどの大きさのある巨大な戦棍。メイス

「…あれか？」

新一は木々の隙間から見えた岩壁に空いた洞窟を見て言う。

そして、出来るだけ音を立てないよう木々に隠れるようにして近づく。

洞窟の傍らには歩哨らしき2体の者が立っていた。

彼らは人間ではない。

人間の子供ほどの体格しかない彼らは、ゴブリンと呼ばれる亜人種であった。

角のない鬼、人間の醜悪さを前面に押し出してデルフォメしたようなその姿は見るだけで人を不愉快にさせる。

特に新一にとっては。

まるで自身の鏡を見せつけられているようで。

「…行くか」

心の中に沸き起こる不快感と苛立ちを、一言で腹の底に封じ込め、新一は木々の間から洞窟へと歩き出す。

何の工夫もなく、正面から堂々と歩いていく。

受けた依頼はこの洞窟に棲むゴブリン共の殲滅。

それが、この世界の新一の日常であった。

第1章・俺はただ普通に生きたいだけだ！（2）

新一は近づいて行く。ゆっくりと歩いて。

何の工夫もなく、ただ無造作に歩いて2体のゴブリンの方へと歩んで行く。

その姿を見かけたゴブリン達は手にした粗末な手斧を構え、耳障りな声で新一に怒鳴る。

当の新一はそれを意にも介さない。

ゴブリン語など分らないし、どうせ分かったとしてもやることは変わらない。

目の前の敵を全て叩き潰す。それだけだ。

一向に歩みを止めない新一を見て、ゴブリンの1体が洞窟の中に向って叫ぶ。仲間を呼んだのだろう。

そして、もう一体のゴブリンは手斧を振りかぶり新一の方へと駆け寄ってくる。

（阿呆め…）

新一は内心で呟く。

こういう状況なら、まず2体で同時に向かってくるべきだ。

さもなければ、各個撃破されてしまうのがオチだ。

ゴブリンが耳障りな叫びを上げ、新一に飛びかかるうとする。

だが、手斧を振りかぶる前に新一の右手が閃いた。

肩越しに持っていた棍が、無造作に、だが恐ろしい速度でゴブリンの頭に振り下ろされた。

グシャー！！

肉と骨が潰れる感触が、戦棍を通して新一の手に伝わる。
血と脳漿をまき散らしながら、ゴブリンの頭は完全に叩き潰されたのだ。

新一は頭をなくし地に倒れるゴブリンを一顧だにせず、もう一方へと歩み寄っていく。

一撃で仲間を倒されたもう一体は完全に狼狽し、逃げるか立ち向かうか決められずオロオロするばかりだ。
やがて、その頭が新一の間合いに入る。

グシャー！！

戦棍は無慈悲に振り下ろされ、もう一体の頭も完全に粉碎した。

そして、棍に付いた血を拭うこともなく、闇に包まれた洞窟の中へ目を向ける。

新一はポケットの中から白い筒のようなものを取り出した。

それはLEDの懐中電灯。

元の世界の数少ない持ち物であり、手回しハンドルで充電できるそれは、照明が乏しいこの世界では頼もしい相棒だった。

新一はスイッチを入れ、鉢金の上に付ける。

そして、頭の潰れたゴブリンの死体を左手で首根っこから持ち上げる。

「さて、行くか」

準備のできた新一は洞窟の中へ歩を進める。

完全に闇の中に入った新一を待ち構えていたのは、矢の一斉射撃だった。

それを完全に予測していた新一は、慌てず騒がず左手のゴブリンの死体を盾にする。

ゴブリン共の持つ粗悪な弓など大した危険ではないが、当たらないに越したことはない。

やがて、矢が尽きたのか射撃に間ができる。

そこに向けて新一がハリネズミになったゴブリンの死体を投げつける。

まるでバスケットボールのように投げ飛ばされたそれは、ゴブリンの数体に命中した。

大したダメージはないだろうが体勢は崩れただろう。

その直後、新一は駆け出す。

悪い洞窟の足場も物ともせず、まるで矢のように。

ライトの白い光が、ゴブリン達を映す。

弓を持ったまま立つ3体と、仲間の死体にぶつかり転倒している2体。

短く持った棍を手近な弓をもったゴブリンに振り下ろす。

グシャ！

頭が潰れた。

返す刀の勢いで、隣にいた1体の胴を横から薙ぐ。

ボグッ！

吹き飛ばされ、壁に激突し動かなくなった。

更に残る一体に左足でハイキックを入れる。

ガスッ！

蹴りは喉に命中し、それを完全に潰した。

3体のゴブリンが死ぬまでにかかった時間は約1秒半。

新一は無表情のまま仲間の死骸から這い出た2体の方へと歩み寄る。

そして、茫然と見上げる2体の頭に棍を落とす。

鈍い音が二つ洞窟に響いた。

「…阿呆共が」

血肉をまき散らして倒れているゴブリン達を見て新一は吐き捨てるように言う。

外の仲間が秒単位の時間で殺られたのを知っているだろうに、勝てるつもりでいたのだろうか？と新一は疑問に思う。

勝てると思っていたのなら馬鹿であり、勝てないと分かっているのかかかってきたのなら大馬鹿だ。

勝てないと分かっていたなら、逃げればよかったのに。

「…くそっ！」

新一は忌々しげに舌打ちを一つすると、洞窟の奥へ向けて歩み始める。

見れば、奥に松明の灯りと思しき光が見える。

恐らくそこにこの群れのボスが待っているのだろう。

新一は血と肉と脂に塗れた棍を持って歩き出す。

もうすぐ仕事は終わる。

相手が逃げても、待ち受けていても。

第1章・俺はただ普通に生きたいだけだ！（3）

「こいつは大したお出迎えじゃないか」

松明の灯りに照らされた洞窟の大きな部屋の様になっている一角。新一はそこにつくなりそう言った。

確かにボスはそこにいた。

エメラルドグリーンの鳥の羽根に彩られたネイブアメリカン風の衣装を身に纏うゴブリンが祭壇らしきものの前で立っている。

だが、新一が見ているのはその前に立ちはだかるモノだった。

それは身長が3mはあろうかという巨人であった。

禿頭の頭には短い角が一本。筋骨隆々の体を負うのは腰布一つ。

手にしているのは、木を粗く削って作ったと思しき巨大な棍棒。

それはオーガと呼ばれる魔物であることを新一は知っている。

その丸太のような腕は、熊をも絞め殺すほどの強力な力を誇り、その皮膚は長弓の矢をも通さない頑強さがある。

だが、知能が低くゴブリンやオーク等に用心棒のように雇われていることがあると言う。

普通の人間にはとても太刀打ちできる相手ではないし、王宮の正規軍でも一個小隊程度の戦力がなければ対抗できないだろう。

だが、新一は臆することなく言う。

「勝てねえって分るなら逃げろ。逃げる奴まで殴ったりはしねえ」

戦闘態勢を取ることなく、気だるげな表情でそう言う。

だが、オーガは一声雄叫びを上げると、棍棒を振りかぶり新一め

がけて襲いかかってくる。

「…そついや、共通語わかんないんだっけか？」

新一は軽く肩を竦め、戦棍を持ち直す。

そこに頭上から赤い光源が降り注ぐ。

それは10本からなる炎の弾の群れ。

（ファイアボルトとかいう魔法か）

それを一度見たことのある新一は、何も持っていない左手を、火球を受け止めるようにかざす。

見れば、ゴブリンのボスが杖を振りかざして何かの呪文を詠唱していた。

恐らく奴が魔法を使ったのだろう。

火球が炸裂し、新一の身体が炎に包まれる。

普通の人間なら火だるまになる一撃。

だが、新一が腕を一振りすると炎は吹き散らされた。

その中からほぼ無傷の新一が姿を現す。

「悪いな。魔法はほとんど効かねえんだ」

ボスを睨みつけながら、新一は言う。

『姫』の話によると新一は魔法の根源となるマナの親和率が致命的に悪いらしい。

故に魔法は絶対に使えない代わりに魔法がほとんど効かないらしい。

炎の中から姿を見せた新一に向って、オーガが棍棒を振り下ろす。

「おせえ！」

その一撃を完全に予測していた新一のハイキックがオーガの棍棒を持つ腕に直撃する。

ベキィ！

けたたましい音ともにオーガの丸太のような腕が奇妙な方向に曲がり、棍棒が地に落ちる。

オーガは蹴られた右腕を押えながら、新一から距離を取った。腕が力なく垂れ下っている。どうやら骨が折れたらしい。

「ほい。返すぜ？」

新一は足元に落ちている棍棒を蹴ってオーガの足もとに転がす。

「もう一度言う。勝てねえってわかってんなら逃げろ。次はないぞ」

そう殺気を乗せた声で言う新一が一步前に踏み出す。すると、オーガは一步後ずさる。

完全に気圧されているのは明らかだ。

もう一步で逃げ出すだろうか？

そう考えて新一はさらに一步を踏み出す。

だが、

「ウガアアアアアア！！！」

緊張に耐えられなかったのか、オーガは棍棒をまだ動く左手で拾

い新一に襲いかかってくる。

新一から見れば、距離もあり速度も遅い最後の悪あがき。これを交わせば流石に戦意を喪失するだろう。

新一はそう考え、軽くワンステップで交わそうとする。だが、その足に絡みつくものがある。

見れば、地面から植物のツタのようなものが生え、新一の足に絡みついていた。

（余計な事を！）

新一はゴブリンのボスに目を走らせる。

見れば、何やら呪文を唱えていた様子だ。

その厭らしく笑う表情はまるで勝利を確信しているかのようだった。

バキィ！

新一の頭にオーガの棍棒の一撃が命中する。

木屑と血が一瞬間に舞う。

常人なら間違いなく頭を割られ、死に至る一撃。

だが、

「…いつてえな」

頭から血を流しながらも新一は生きている。

しかも、軽く皮膚を切っただけで大した傷ではない。

更に見れば、オーガの手に持つ棍棒が大きくへこんでいる。

木材の中では硬い部類に入る櫓でできた棍棒が、である。

「殺すぞコリアー!!」

怒りに目を血走らせた新一の左フックがオーガの脇腹にめり込む。オーガの胴が大きく揺れ、その巨体が傾ぐ。

そして、落ちてきたその顎めがけて右のアップパーが放たれる。

グシャ!

顎の骨が完全に砕ける音がした。

オーガの巨体は軽く宙に舞い、その後地面に落ちて大の字に寝転がる。

ビクッビクッと痙攣を繰り返すその体から生命の熱が失われるのはそう遠いことではない。

その様子を見たゴブリンのボスはがっくりとその場に崩れ落ちる。勝負は着いたのだ。

第1章・俺はただ普通に生きたいだけだ！（4）

「さて、お前さんはどうするよ？」

頭から流れ出る血を拭いもせず、新一はゴブリンのボスを見下ろす。

その表情には勝ち誇った様子などはない。
ただ無表情に、項垂れる小鬼を見下すだけだ。

そんな新一の視界に動くものが見当たる。
祭壇の更に奥に続く通路の奥に複数の人影が見える。
恐らく、ゴブリン達の女子供やそれに類する非戦闘員だろう。
そんなものを虐殺するほど新一は非情ではない。

新一の受けた依頼はゴブリン達の殲滅。
だが、実害がなければ殲滅を追い払うに代えても問題はないはずだ。

「今後ここに近づくな。人間を襲うな。そうすりゃ死にはしない」

「…ワカッタ」

新一の言葉に、ゴブリンのボスは訛りの酷い共通語で返事をする。
その後、立ち上がったボスは振り返り、洞窟の奥にゴブリン語らしい言葉で大声で言う。

それから数秒の後、洞窟の奥の気配が一斉に消えていく。どうやら別の出口から洞窟を出ていくようであった。

「…じゃあな。もう来んなよ」

そう言って新一は背を向けてその場を去ろうとする。
仕事は終わった。早くこんな獣臭い洞窟からはおさらばしたい。
そんな新一の背中に向けて、ゴブリンのボスは呪詛のような声で
言う。

「…バケモノメ」

それを聞いた瞬間、新一の歩みが止まった。
ゴブリンのボスは戦慄する。
彼の背中全体から恐ろしい怒気と殺気が放たれていたからだ。

「…何だと、コラ!!」

鬼の形相で新一は振り返る。
恐怖のあまりゴブリンのボスの心臓が死ぬ。

「誰が化物だ、誰があ!!」

そして、凄まじい勢いで戦棍が振り下ろされる。
ゴブリンのボスは身動き一つできない。

バキィ!

石の礫が爆ぜる。

棍の振り下ろされた先はゴブリンの足下。

「…とつとと行け! 殺っちまうぞ!!」

三白眼で睨みつけながら新一は大音声で言う。

ボスはしばし呆然としていたが、やがて洞窟の奥へ脱兎の如く逃げ出した。

新一はその後ろ姿を見送った。

そして、おもむろに胸のポケットから煙草の入った皮の巾着を取り出す。

一本の紙巻きを取り出した新一は、象牙製のシガレットフォルダーを接続し啜える。

「…化物、か」

そう呟いて、新一は愛用のジッポライターで火をつける。

そして、肺の中まで吸い込んで煙を吐き出す。

「…俺は化物から見ても化物、か」

新一は天井を仰ぎ、虚ろに笑って言う。

化物。それは、幼い頃からの新一に向けられてきた呼び名。

新一が最も忌み嫌う言葉。

新一は低く笑い続ける。

煙草と獣の臭いの入り混じる、暗い洞窟の中。

新一はただ己を嗤っていた。

第1章・俺はただ普通に生きたいだけだ！（5）

カランカラン。

真っ先に新一を出迎えたのは、扉についたベルの音。
ここ半年ほどで聞き慣れた音。

扉の奥に広がっていたのは、木製のテーブルとベンチのような椅子の並ぶどこにでもあるパブの光景だった。

複数のランプが灯された夕暮れの店の中には、既にそこそこ客が入っている。

店のカウンターの奥からは何かかが焼ける音が聞こえ、美味そうな料理の臭いが漂ってくる。

ここは『銀の穂先亭』という名の酒場兼宿屋兼冒険者の店。
冒険者の仲介などを行う店としては、この町では最大手だ。

とは言え、帝都のそれとは比べ物にならないほど小さく、常連の冒険者も30人いるかないか、という所だ。

「いらつしゃい…おや、新一かい？」

「お疲れ、女将さん」

カウンターから声をかけてくる女将、リイナに新一は軽く挨拶を返す。

リイナは新一より10近い年上の女性だ。

その割にはその容姿やスタイルは衰えることはない。

赤毛のロングの髪が特徴の美人で、いまだ言い寄ってくる男は後を絶たないらしい。

「新一、手間をかけすぎだよ。さっさと手伝ってくれよ」

そう言っただけで忙しく厨房で働くのは、ウェーブのかかった灰色の髪
の浅黒い肌の子供のような容姿のチップだ。

身長が新一の半分ほどと小さいが、それは彼の種族ハーフリング
の特徴であり、年齢そのものは新一と変わらない。

彼はこの店の従業員であり、冒険者の一人でもある。新一とも度
々冒険に行く仲だ。

「悪いな、チップ。すぐ厨房に入る」

苦笑しながら新一はチップに答える。

新一はこの店で料理人をやっている。

腕は確かであり、リイナの味覚が常人とかけ離れていることもあ
り、重宝される存在である。

「よつ、待ってたぜ新一」

テーブル席で木製のジョッキを頭上に掲げながら挨拶をしてくる
者がいる。

茶色がかった髪に巻いた青いバンダナがトレードマークの、長身
痩躯の男だ。

彼の名はトビー。

この銀の穂先亭の常連の一人であり、腕の立つ冒険者だ。
新一とも度々出かけることのある顔見知りである。

「トビー、また昼間から飲んでるのか？」

少し眉をしかめながら新一が言う。

彼の体から濃厚な酒の臭いを感じだからだ。

「かてえこというなよ。この間結構な儲けが出たばかりなんだしさ」

そう言いながらトビーはジョッキの中のエールを呷る。

そんなトビーを見ながらため息を一つつくと、新一はカウンター席の近くにいる少女の方へと歩みよる。

依頼主に依頼の報告をしないとイケないのだ。

「…あ、新一さん」

少女が新一に気づき声をかけてくる。

彼女はアナルダ。

若草色の簡素な衣服を身に纏う、茶色い髪を三つ編みにした大人しそうな娘である。

彼女は薬草売りであり、治療師である。

魔法に頼らない薬草による治療は効果が薄い。だが、安価であるため頼りにする冒険者も多い。

今回の依頼は彼女から請け負ったのだ。

「あの…どうでした？」

「全部片付けた。これで安全だろうよ」

そうぶっきらぼうに言って新一はカウンターに刺のようなものを転がす。

それはオーガから切り取ってきた角であった。

「これ、オーガの角じゃない？」

チップがそれを覗き込んで言う。

このハーフリングは意外に博識であり、特にモンスターの知識はかなりのものである。

「ああ。下手に自警団を動かさなくてよかった」

新一はチップに頷いて言う。

この街付近でモンスターが現れば、本来は町の自警団が対処するものだ。

だが、オーガが相手では太刀打ちするのは難しいだろう。もし戦えば相当な犠牲が出たはずだ。

「オーガを無傷で退治したのかい？流石新一。すごいねえ」

手を動かしながらチップが素直な称賛の言葉を述べる。

本当は一撃もらっているが、大した傷ではなかったし、既に血も止まっている。

川で髪も洗ったので傷がばれることはないだろう。

別に無傷云々の名誉はどうでもいいのだが、変に氣遣われるのも嫌だからだ。

「…凄いですね、新一さんは」

胸の前で両手を組んで、アナルダは目を輝かせて言う。

「新一さんのお国の人はみんなそんなに強いのですか？」

アナルダの問いに新一は微かに苦笑する。

この酒場の者達には自分は遠い国から流れ着いた、と説明している。

本当のことを話しても信じてもらえるかどうか微妙であるし、説明するのも面倒くさいからだ。

にしても、アナルダの言うことは少々突飛すぎる。

自分のような人間など、新一は一度も見たことがない。

もしいれば、どれほど救われたことだろうか。

「ぎゃっはっはっは！んなわけねえだろ、アナルダ！！」

テーブル席のトビーが机をバシバシ叩きながら、爆笑しつつ言う。その言葉は新一の内心とまるで同じものだった。

だが、

「そんな化け物が大量にいたら、とつくに世界なんてその国に征服されてるぜ！」

化け物。

その一言が、新一の心に突き刺さり、そして感情の袋を割った。

「…あんだと、コラア！！」

怒気を漲らせた新一の声に、店中が静まりかえり視線が集中する。だが、新一はそれに構わず、鬼の形相でトビーの方へ歩み寄る。そして、座ったままのトビーの襟首を掴み、頭上高くへと持ち上げる。

「お、おい！？どうしたんだよ！？」

一気に酔いが醒めた様子でトビーは狼狽し、新一に呼びかける。自分としてはただの軽口のもりであつたし、新一は冗談の通じない人間ではないと認識していた。

だが、怒りに燃える彼の様子は尋常ではない。

「誰が…誰が化け物だ！！俺は…！」

トビーを新一の手に力が込められる。

投げ飛ばされる。店の誰もがそう思った。

「やめなさい！三池新一！！」

次の瞬間、店の中に声が響いた。

凜とした、静かな威厳を湛える少女の声。

その声で店の中の時間が凍りついたように止まった。

怒り狂う新一も含めて、だ。

店の誰もが声の主のいる入口の方を見る。

そこに立っていたのは、ようやく十代半ばに達しかかったほどの年齢の少女だった。

白を基調としたブレザー風の衣装の上に、白いマントを羽織るといった容姿。

長い金髪と青い瞳、そして素晴らしく整った顔立ち是最上質のフランス人形を思わせる。

彼女の名はリミアエル・プルミエール・ランスロット。

ランスロット朝アヴァロン帝国の第14皇女であり、新一の命の恩人である。

「姫さん…」

自分を見据えるリミアを見て、茫然とした様に呟く。
そして、持ち上げていたトビーをゆっくりと椅子に下し手を放した。

その眼からは怒りの炎は完全に消し飛んでいる。

「…悪かった、トビー」

新一はトビーに軽く頭を下げ謝罪した後、店の入り口へと歩いていく。

「あの、新一さん！」

その背中に向けてアナルダが声をかける。

まだ報酬も渡していないし、何より自分の一言が騒動のきっかけになったことを詫びたかった。

「…報酬はいい。そいつでみんなに一杯おごってくれ」

顔を向けず新一はアナルダに言う。

そして、ふと足を止め俯いたまま続ける。

「一人だった」

「え？」

新一の言葉に、アナルダは当惑する。

一体何を言っているのか、見当がつかなかったのだ。

「俺みたいな化け者は俺一人だった。…俺一人だけだった」

新一は口元に自嘲的な笑みを浮かべながらそう言う。
そして、すれ違い際にリミアに視線を僅かに移し、

「…」

リミアが何も言わないのを確認した後、逃げるように店を出た。

第1章・俺はただ普通に生きたいだけだ！（6）

「タバコは止めるんじゃないかなかったですか？」

銀の穂先亭から少し離れた河の畔で煙草を啜える新一に、リミアが声をかける。

この水車が見える場所は新一とリミアの会った場所でもある。何かあると新一はここに来て煙草を吸う。それを知っていたリミアは彼を追いかけてここに来たのだ。

「…大分減らしてはいる。一日に3本しか吸わなくなったんだからな」

シガレットフォルダーに口をつけながら、少しづつが悪そうに新一は言う。

「高いからですよ、それ」

苦笑しながらリミアは煙草を減らしている理由を指摘する。

この世界では紙巻き煙草は高価である。

紙自体がそこそこの貴重品である上、作るのに少々手間がかかるからだ。

10本も買えば、3日分の食費と宿賃が消える。

「噛み煙草か嗅ぎ煙草にすれば安いのに」

「…あんなもん煙草じゃねえ」

他愛のない会話をしながら、リミアは新一の隣に並び河原に座る。

それにつられるように新一もまたその場に座った。

「…何かあったのですか？」

新一の横顔を覗き込みながら、リミアがそう切り出す。

「…大した事じゃない」

新一は苦笑して答える。

「俺は…化け物から見ても化け物かって…な…」

考えてみれば、今更な話である。

それにゴブリンは人間より脆弱な生き物だ。

人間から化け物呼ばわりされるのだから、ゴブリンが化け物呼ばわりしても何ら不思議はないのだ。

そう、頭では分かっている。

頭では分かっているのだ。

だが…

「…そうですか」

大体の事情を察したりミアは、新一から視線を外し、川を遡った先にある水車小屋に眼を向ける。

「…覚えてますか、新一？」

「何を？」

「私が新一に叩かれた日の事です」

呟くように切り出したリミアに、得心のいった新一は、ああ、と呟く。

そして、大体半年前の日に思いを馳せた。

第1章・俺はただ普通に生きたいだけだ！（7）

ガラガラと車輪が鳴く音がする。

石畳の敷かれた街道を、馬一頭に引かれた軽馬車が走る。

その速度は街道の法定速度を遥かに超している。

だが、それを見咎める者はない。

馬車は追われているのだ。

背中から迫るのは、狼や猪に跨るやや小柄な人間のような姿、豚のような顔と、肥満した体軀のそれはオークという名の亜人種であった。

邪悪なる神オークスを信奉し、普段は腐海と呼ばれる森の奥に住む彼らは人間にとって不倶戴天の敵であり、度々小競り合いを繰り返していた。

帝都へと続く街道でそれは起きた。

突如、オーク達の群と鉢合わせる事になったのだ。

その数はざっと数えて300体以上。

オークの群としてはそれなりに大きい部類である。

対し、馬車側にはリミアと新一の二人しかない。

大して離れてもいない近隣の町に出向くだけであつたので、護衛の兵を連れていなかったのだ。

最も大した人数のいないリミアの館の護衛を連れていても結果は変わらなかったかもしれないが。

「くそっ！どうなつてやがる！？」

新一が悪態をつきながら軽馬車を操る。

「街道沿いは安全なんじゃなかったのか!？」

「安全なはずです。こんな事…有り得ない…」

新一の問いに、リミアは半ば呆然とした様子で言う。

街道は各地の領主によって管理され、警護の兵が特定の間隔で設置されている駅に設置されている。

パトロールも万全を期した体制になっており、モンスターが現れたとの報があれば直ちに駆逐される。

こんな大量のオークの群れが現れたという情報があれば、直ちに討伐隊が組まれ、街道付近に現れる前に始末されるはずだ。

だが、オークの群は現に新一達の馬車を追う。

今走ってくるのは先遣隊のようだ。

だが、それでも数は30体を超えている。

速度は相手の方がわずかに上で、振り切るのは難しそうだ。

「姫、炎術で吹き飛ばせないか？」

馬車を操りながら新一が隣のリミアに声をかける。

リミアは皇女でありながら強力な魔法使いでもある。

その実力は宮廷魔術師のミーティアが舌を巻くほどであり、特に炎を操る炎術を得意としている。

あの程度の敵なら、以前に見せてもらった火球爆裂で吹き飛ばせると思うのだ。

だが、リミアは軽く首を振って答える。

「奴等は散会しながらこちらを追ってきています。火球爆裂は警

戒されていると見るべきです」

「…厄介だな」

新一は忌々しそうに舌打ちをする。

火球爆裂の攻撃範囲は広いが、散会されていては巻き込めても2
〜3体程度だろう。

さすがのリミアも10発立て続けに火球爆裂は撃てない。疲労で
倒れてしまっだろう。

かといって足を止めて新一とリミアで迎え撃っても、今度は後続
のオークの群れに追いつかれてしまっだろう。

「…新一、お願いがあります」

リミアが覚悟を決めた表情で言う。

「…なんだよ？」

その様子にただならぬものを感じた新一が怪訝そうに尋ねる。
リミアはその問いに、軽く息を吸った後、目を閉じて答える。

「…私を殺してください」

「あん？」

言っていることの意味がわからない。そんな様子で新一が尋ね返
す。

「なんで、俺が姫を殺さなきゃいけないんだ？」

「…奴等の狙いはきつと私です」

悲しそうな表情ではっきりとリミアは言う。

「…あ？何でそう言えるんだよ？」

新一は口ではそう言った。

だが、彼女の言わんとするところは実は新一にも分かっていた。彼女の扱いは帝都でも微妙である、と言う噂は聞いていたのだ。リミアは才能の溢れる優秀な皇女だが妾腹の生まれであり、しかももう母は生存しておらず政治的な後ろ盾がない。

だが、皇帝は愛妾の生き写しのような美しい娘を大層可愛がっており、またその才能を愛している。

故に帝都に住む正妻ガートルードの子供ら、つまり腹違いの兄や姉に疎まれているのだ。

今回の件もガートルード派の何者かがオークにリミアの抹殺を依頼した可能性はある。

さもないければ、こんな街道沿いにオークの群れが現れるはずはないし、軽馬車に乗る小娘が強力な魔法使いだとは思うまい。

「私がいなくなれば、新一は助かる可能性があります。でも、オーク共の手になどかかりたくはありません。だから…」

リミアがそこまで言ったところで、新一の右手が閃いた。

パシーン！

平手で頬を打たれたリミアが、赤くなったそこを押さえ戸惑った表情を新一に向ける。

「…新一」

「わりいが寝言は寝てから言ってくれ、姫」

実に面白くなさそうにそう言いながら、新一は左手でポケットの中からシガレットフォルダーを付けたタバコを取り出し啜える。
そして、ジッポライターを取り出し、火をつける。

「でも、新一…！」

「これ頼むわ」

白い煙を吐き出しながら新一は馬車の手綱を、何か言いかけたリミアの手に押し付ける。

リミアは思わずそれを受け取り、言葉を切る。

「ちよつと行ってくる」

「え？」

そう言うが早い、新一は戸惑うリミアを馬車の上に残して飛び降りた。

ズシャ！

地に落ちた身体を何度か転げさせた後、新一は立ち上がる。
少し痛かったが、そんなものを感じている暇はない。

今こそ、命を助けられた恩を返す時だ。そう思うと胸が高鳴る。
遠ざかっていく馬車の上でリミアが何か言った気がしたが、聞こえないので無視を決め込む。

あのまま手綱さえ握っておけば、適当に次の駅までは着くだろう。そうなれば、リミアは安全だ。

「ここから先は通さないぜえ…」

凶暴な笑み浮かべながら新一は向かってくる敵と対峙する。

そして、街道脇の全長6mくらいの細長い、白い石の柱の根元を掴む。

それは、街道を照らす魔法の街灯であり、柱の先には消えることのない魔法の灯りが灯っている。

もちろん、整備にはかなりの金額が必要で、壊すと重罪に問われる。

だが、この国の姫を助けるためだ、そこは勘弁してもらおう。

そう考えて、新一は柱を握る手に力を込める。

ミシミシミシ…と柱が軋む。

見れば地面のレンガも軋んでいたことに気がついただろう。

「むん！」

新一が気合の声とともに力を込める。

すると、街灯は地面に埋められた基礎から引っこ抜かれ、新一の獲物となった。

丁度そこにオーク達の先遣隊がやってくる。

だが、彼らは一様に目を疑った。

自身の数倍もある柱を構えて人間が立っているというありえない光景を見たからだ。

そして、その一瞬後にその柱が振り回される。

「うりゃあああああああ！！！！」

裂帛の気合とともに新一は柱を振り回す。

最初の一体の胴が裂けても、二体目の頭が潰れても勢いを殺すことなく振り回された街灯は先遣隊の数体を薙ぎ払う。

人間ではありえない攻撃で隊の数名を失い、呆然とするオーク達に新一の柱が再び襲い掛かる。

血と肉片と撒き散らしながら、まるで台風のように振り回される柱の数撃で、オーク達は騎乗していた獣達ごと蹴散らされた。

後に残るのは、原形を留めない幾つもの死体と、血まみれの柱を持つ血まみれの新一。

やがて、オーク達の本体が追いついてくる。

目の前を埋め尽くすかのごとき、豚人間の群れ。

だが、新一の笑みは消えない。

むしろ、それは一層深くなる。

背筋がゾクゾクする。

だが、頭の中は恐ろしくクリアーだ。

戦うことは好きじゃないはずなのに。

目の前から迫るモノ達を叩き潰したくてたまらない。

「うらあああああああああああああ！！！！！！」

まるで獣のような雄たけびを上げ、新一は突撃する。

鰯の群れを飲み込む鯨のように、巨大な棒を振りかざしながら。

そして、それから一時間と半。

リミアがパトロールしていた兵を連れ、襲われた場所に戻った頃、その周辺は屍山血河と化していた。

「…よう。遅かったな」

そして、その真ん中で血まみれの新一が、ところどころ外部の石の部分が破損し、金属の芯が露出した柱に寄りかかりながらタバコを吹かしていた。

第1章・俺はただ普通に生きたいだけだ！（8）

「…あの時は、少し新一が怖かったです」

苦笑しながらリミアが言う。

「…そりゃそうだな」

同じく新一も苦笑しながら言う。

100体以上ものオークを虐殺し、血塗れになった男を見れば誰だって怖いものだ。

「…でもね、同時に少し見惚れてしまいました」

表情を少し緩めてリミアが言う。

見れば、少し頬が紅潮しているようだった。

「…新一は虎が何故あんなに美しいかご存知ですか？」

「…さあな」

リミアの唐突な問いに、新一は眉をしかめて返事をし、煙草を吹かす。

「生まれながらに強いからなんですよ、きっと」

リミアはそう言って穏やかに笑う。

「私は美しいと思いますよ、化け物である新一が」

「…わあつたよ」

降参、と言わんばかりの口調で新一はそう言い、両手を軽く挙げ
る。

「姫さんの言いたいことはわかる。俺もあん時は自分が化け物で
よかった、って少しだけ思えた」

そう言つて新一も穏やかに笑う。

そう。よかった。

自分が化け物であつたお陰でこの姫を助けることができた。
別の世界に置いてきた妹を思わせる、この命の恩人の少女を助け
ることができた。

それは本当によかった、と心の底から思う。
だが…

「…でもな、姫さん」

新一はシガレットケースを咥えたまま煙草を引き抜き、川へと捨
てる。

「この力のせいで失つてきたものも、結構あるんだ」

新一は自身の半生を思い出す。

ただ強い、ただ力がある。そして、生きる為の器用さがない。
それだけで、無意味な喧嘩や騒動に巻き込まれ、不良のレッテル
を貼られ、人々から白い目で見られてきた生活を。

幼い頃から続けていた拳法の道を閉ざされ、就職も進学もままな
らず、ヤクザの片棒を担いで生きていくしかなかった人生を。

「俺は…こんな力なんて要らない。…ただ、普通に生きたいだけだ」

そう言つて新一は川の方へ視線を向ける。

「…そうですか」

軽くため息をついてリミアはそう言い、新一の傍に寄り添う。

新一の心の傷は深い。

ここで千の言葉を尽くそうとも、癒すことはできない。リミアはそう悟つたのだ。

「…でも、いつか来ると思います。貴方も自分のことが好きになれる日が」

「…だといいな」

新一の横顔を見ながら言つりミアに、苦笑しながら新一は返事をする。

その後、二人はしばらく川を見ていた。

まるで本当の兄妹のように寄り添つて、ただ川を眺めていた。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（1）

少女がいた。

年の頃6つ程の少女が道路の上にいた。

公園から道に飛び出したボールを追いかけてきたと思しき少女が車道の真ん中にいた。

そこに向かってくるモノがある。

その背に荷物を積んだ中型のトラックだ。

運転手は居眠りでもしているのか、速度が落ちる様子はない。

少女はボールを拾った後、トラックの方を向き、状況が飲み込めず立ち尽くしていた。

その時、俺は既に走り出していた。

別に少女と縁があるわけではなかったが、それでも俺は走り出していた。

子供を助けるのに理由など要らないからだ。

だが、悲しいかな俺の膂力は常人の比ではない。

全力で走って少女を突き飛ばしたりすれば、車に轢かれたのと大差ないことになってしまっただろう。

だから、俺がとった行動はトラックの正面からドロップキックを食らわすことだった。

軽自動車くらいなら、前蹴りで蹴り飛ばしたことがある。

だから、ドロップキックならトラックぐらいイケるだろう、そう考えての行動だった。

ぶつかった瞬間、凄まじい衝撃が身体を駆け抜け、視界が闇に包

まれた。

同時に上下の感覚がなくなり、まるで水のない水中で浮いているような状態になった。

ちよつと無茶だったか、俺は死んだのか、そんなことを考えていると突如目の前に、青い扉が現れた。

闇の中を青い光が長方形に切り取っただけに見えるそれを、新一は扉だと認識できた。

それを開けよう、と新一は思った。

ここにいっても埒が明かないし、あれがあの子への扉だとすればそれはそれでよかった。

そう考えるだけで扉は開き、新一の身体はそこから溢れる青い光の中へと吸い込まれた。

そして…

目を覚ますと、そこに見えたのは窓から差し込んでくる光。

逆三角形の天井にあるそれは、ここがここ半年で住み慣れた銀の穂先亭の屋根裏部屋だと教えてくれる。

簡素なタンスやテーブルやベッドの他、冒険者としての荷物が部屋の隅に転がっているほかは何もない殺風景な部屋

冒険者を始めた頃、リイナの好意でここにほとんど無料で泊めてもらっていたのがきつかけだったが、金のある今でも他の部屋に引越すのが面倒であるためここで暮らしている。

「あん時の夢か…」

新一はベッドの上でそう呟く。

それは新一がこちらの世界にやって来た時の出来事だった。

「…今も生きているんだよな、俺」

そう呟きながら、新一はなんとなく手を目の前にかざしてみる。自分の手はいつ見ても変わらず、無意味に大きい。

タコなどは特にない手はリミアからは綺麗と言われるが、戦士らしくないとチップやミーティアには不評である。

開いたり閉じたりしてもいつもと変わらない。感覚もちゃんとある。

実は今の自分は臨死体験中か何かで、現実ではない世界の夢か何かを見ているのではないか、と考えていたこともある。

それを相談した相手の宮廷魔術師ミーティアは呆れ果てた口調でこう言った。

『新一さんはあ、物理的にこの世界に存在してますからあ、安心して下さいい。第一い、いつもあんだだけ大暴れしてるのにい、臨死体験中の夢で全てを片付けないで下さいい。修繕費いくらかかると思ってるんですかあ？』

御もつともな意見だ、と新一は思う。

確かにこの一年とちょっと新一は確実に生きてる。

大暴れしている感覚も確かだし、腹もきつちりと減る。

「…つと、やべえ」

今の時間を思い出し、新一はベッドから飛び起きる。

そろそろ朝の仕込が始まる時間だ。

サボると朝飯が抜きになる。

新一は急いで着替え、仕事に出かける。

今生きていようと、臨死体験中であろうと、この世界が何であろうと、時は巡り明日はやってくる。

だから、今日も新一は生きていかねばならない。

自分のことが大して好きになれなくても、のたれ死ぬのはごめんだからだ。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（2）

朝日が昇ったばかりの山の中、新一は坂道を歩いていく。両肩に樽を担いで。

ここは町の近郊にある山。食用にできる植物や動物も多く、薬草の類も多数ある。町の人間の生活を支える重要な場所だ。

先日ゴブリンの群れを殲滅したの場所もすぐ近くにある。万が一帰ってきていたら、今からでも殴りに行くところだが、その気配はない。

新一は毎朝この山の中腹にある川に水を汲みに来る。

美味しい料理を作るのに美味しい水は欠かせない。

別に町の井戸水も不味くはないのだが、納得できるスープを作るには物足りない。

木々の隙間を抜け、目的地の川へと到着する。

白い岩肌の上を歩いていき、滝になっている場所の滝壺付近まで行く。

すると、そこにはすでに先客が居た。

「おはようございます、新一」

滝壺付近の泉のようになっていて場所ですべて沐浴をしていたのは、長い金髪が特徴の少女であった。

彼女の名はリミア。新一の命の恩人であり、この世界で初めて出会った人間である。

一応このアヴァロン帝国の皇女だが、妾腹であり、皇位継承権からあまりにも遠いためこうした田舎町で暮らしている。

最も本人に言わせれば、後宮で飼い殺しになっているよりはいい、との事であるが。

そんな彼女は泉の中で両手を胸の高さで合わせながら、こちらに澄ました顔を見せる。

身に纏っているのは、薄手の白いローブだけである。それは、水を吸い少女の肌に張り付いていた。

「おはよう。…今日は姫さんに先を越されちゃったか」

樽を岩の上に下ろして新一は言う。

リミアは毎朝ここに来て沐浴をしている。

何でも東方にあるイズモという国の習慣である襦をしているのだとか。

新一の住んでいた国にも似たような習慣があった。

そういえば、姫は一年前、新一の言葉を聴いて『イズモ語に似ている』と言ってた。

話を聞いてみると、どうも新一の故国の過去をそのまま描いたような国であるらしい。

一度くらいは行ってみたいが、相当な距離があるらしく一年以上の長旅になるらしい。

今の新一の身ではそれはできない相談だ。

せめて、姫が成人するまでは側にいて、その身を守りたい。

それぐらいしか、彼女に恩を返す術を新一は知らないからだ。

「…冷たくないか？この川」

新一は樽を足元に置き、水に手を浸けながら尋ねる。

春先の川の水はまだ冷たい。

正直、朝早くに浸かりたいものではないと新一は思う。

「確かに冷たいですが、おかげで目が覚めますよ?」

だが、リミアはあっけらかんとそう答える。

一瞬リミアの身体感覚は微妙におかしいのではないかと心配する新一だが、そういえば妹もやっていたことを思い出す。

妹は祖父の神社の手伝いで巫女さんをやっていたこともあるのだ。

「…ま、風邪はひくなよ?」

不意に妹を思い出した新一は、照れ隠しをするように少しリミアから視線を外して樽の蓋を開け、水に浸けようとする。

「出ましようか?水を汚してしまつては…」

「じつとしてくれるほうが助かるな」

身動きしようとするリミアを新一が止める。

正直、常に体を清潔に保っているリミアが一人入っている程度では水質には何の問題もない。

むしろ、身動きされると川底の土が舞ってしまふ。そちらの方が問題だ。

「姫さん一人が入つてて水質が変質したら、どれだけ特異体質なんだよって驚くところだ」

「…新一は私が入つていても気にもならない、と?」

ぶっきらぼうに言う新一に、リミアは少しだけ不満そうに言う。そう言ったリミアに、僅かに視線を向け、

「いや…気にならないわけじゃない…」

一つ目の樽の中に水を汲んだ新一は、リミアから目を逸らしつつ微かに頬を高潮させながらリミアに言う。

「…そのな、姫。少しいいか？」

「？なんですか？」

新一の突然の態度の変化に、リミアが不審そうに言う。

「…服が透けてる」

目を逸らしながら、新一は紅潮した頬を右手の人差し指で掻きながら言う。

リミアの服は薄手の白いローブのみで、しかも水に濡れて肌に張り付いている。

朝日に照らされたその下には、彼女の肢体がくつきりと映ってた。

「…っ！！新一！？」

「俺のせいじゃねえだろ！？」

咄嗟に胸元を両手で隠しながら非難がましい声を上げるリミアに、新一は目を逸らしたまま反論する。

「あんまり暴れないでくれ。水が濁る」

「それはそうですね…」

視線を逸らしながら樽に水を汲む新一を睨みながらリミアは何とも不満そうな顔を向ける。

「第一、姫はまだ子供だろ？そんなの見たって…」

正直、姫は綺麗だと思うし、見たくないわけではない。
だが、それを言うとは照れくさい。
だから、照れ隠しに心にもない悪態をついてみたのだが…

「どうして人が気にしている事を平気で言えるのですか!？」

リミアはとてもショックな様子で抗議し、

「…新一なんて嫌いです」

後ろに振り向いてむくれてしまった。

「あ、いや…その…」

新一は慌ててフォローしようとする。

リミアは年の割には身長が低く、正直幼児体型である。年齢的には中学生程度のはずだが、下手をすると小学生にも見えかねない。

「…ミーティアはどうやったのでしょうか」

自身の胸元を見ながら、リミアは呟く。

一応家臣であり（社会的発言力はミーティアの方が上だろうが）友人であるミーティアは見事なグラマーである。

年は向こうの方が6つ程上だが、どうもそれだけで差がついたの

ではないと思えてならない。

「…やはり、もっと牛乳を飲まないと大きくなれないのでしょうか…？」

「…あいつがそんなに牛乳を飲んでとは思えないけどな」

呟くりミアに、背後から新一が言う。

ミーティアは身体が弱い。当然のように胃腸も弱いだろう、と新一は思う。

実際彼女はかなり小食だ。正直、新一もあれだけの食事ですらやってあれだけ栄養を蓄えられたのかわからない。

「…ま、腹壊すなよ？」

「…新一、やっぱり嫌いです」

新一の言葉に少し涙声になるミアの言葉を聴き、新一は自身の不器用さを改めて呪う。

自分の言葉はフォローになってないどころか、逆に姫にダメージを与えているだけだ。

結局、新一はその後も自ら墓穴を掘り続け、素直に謝って許してもらえるまで相当な時間を費やした。

その結果、見事に朝飯は硬いビスケットと水だけになってしまった。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（3）

さて、仕込みの開始である。

新一は今厨房の机の上に立っている。

机に置かれているのは、昨晚作って寝かせておいた小麦粉に水を加えこねたもの。いわゆる麺の生地である。

この辺りの小麦粉は質がいたため、かん水なしでも腰の強い麺を作ることができる。この世界ではかん水の入手が極めて困難であるため、この点は重要である。また、麺にかん水臭さを与えないのもいい。

新一は拳二つほどの大きさの生地を手取る。

そして、両手を開きそれを大きく伸ばす。

そうして、細長くなったそれを2つに折り返し、再び両手で伸ばす。

そして、4つ折になった生地を更に伸ばし、折り返す。

それを繰り返していくうち、やがて生地は麺へと姿を変えていく。最後に、麺の両端を切り離してほぐしてやれば出来上がりだ。

麺ができたら、後はスープだ。

鍋に入っているのは、鶏がらをベースにして、臭みを消すために玉ねぎやニンニクを加え、更に煎り豆を加え、塩で味を整えたものだ。

それを湯で温めていた深底皿に入れ、更に麺を入れ、具材のモヤシと葱を載せる。

これで、半年前から登場した銀の穂先亭のオリジナルメニュー、ラーメンの完成である。

元いた世界のもの比べると、食材のレパートリーは貧弱だが、それなりの味には仕上がっている。

「はい、お待ち」

出来上がったそれをテーブルに着く子供のような姿の者の前に出してやる。

彼の名はチップ。

ウェーブのかかった灰色の髪のやや浅黒い肌の10代前半の少年のような容姿をしている彼は、人間ではないハーFRINGという種族であり、実年齢は新一より僅かに下という程度である。

「よつ、待つてました!」

チップは手を叩いて料理を歓迎する。

そして、手元にある2本の短い棒を手にする。

それは、箸という代物である。

新一の世界で使われていたそれは、半年ほど前から宮廷で使われ始め、今では地方でも使われるようになっていく。

基本的に手掴みでものを食べていたこの世界で箸というものは画期的であり、テーブルマナーを大きく変えるものであった。

この他食事用の匙も広まったが、これらは新一が友人を通して広めたものであった。

ただ、西洋風のこの世界に箸はいまひとつ似合わないことを考え、新一は僅かに後悔する。

どうせならフォークとスプーンを広めれば良かったかもしれない。

チップは器用に箸を操りながらラーメンを啜る。

彼の手先は器用で、その箸捌きは今や新一より上かもしれない。

「ん、うまいねえ。腕は落ちてないね」

実に幸せそうな顔で、チップは言う。

ラーメンは昔から新一の得意料理の一つである。

元の世界にいた時から十分店を出せる代物だったが、この世界では今や銀の穂先亭の名物料理として扱われることになった。

他の店も真似しようとしているが、新一のそれと比べるとまだまだである。形だけ真似ても麺が決定的に駄目だ。あの手延べの技法には結構なコツがいるのだ。

「畜生。今度はてめえが作れよ」

そんなチップを見ながら、新一が苦笑して言う。

美味しそうに自分の作ったものを食べる者を見るのは嫌ではないが、新一自身は朝ビスケットと水だけである。さすがに腹が減る。

「何言ってんだよ。何日か料理人の仕事サボってたんだから、腕を見ておくのは当然だろ？」

そんな新一の心中を知らぬ気にチップは澄まして言う。

そういう口実でチップは新一にラーメンを作らせたんだが、どう見ても自分が食べたかっただけにしか見えない。

確かに、ここ最近冒険者としての依頼が忙しく料理人としては働いていなかったが、その程度で腕が落ちるはずもない。それくらいはチップにもわかるはずだが。

「そういえば、リイナさん遅いな」

新一は朝出かけたまま、まだ帰って来ない銀の穂先亭の女将を思い出して言う。

チップの話によると、リイナは新一が帰って来る前に近所の造酒所に酒を取りに行ったはずだ。

大した距離ではないし、すぐに帰ってくると思っていたのだが…

「荷物に苦戦しているのかもしれないし、迎えにいくかな」

リイナの腕力は女性としては強いほうだが、常人レベルである。対し、酒というものは中々重いし運搬に気を遣う。

自分が応援に行く方がいいだろう、と新一が店から出ようとしたその時、

ドスン！

突然、店が大きく揺れた気がした。

「…？なんだ？」

新一がいぶかしむ暇もなく、揺れは2度3度と襲い掛かる。

「新一、これ！？」

チップが席を立てて僅かにうるたえて言う。

この感じは店に何か巨大なものがぶつかっているようだ。

銀の穂先亭は一般の建物としては頑丈に作られているが、放っておけば壁が破壊される。

「チップ、戦闘の準備して来い！」

「あいよ！」

新一の言葉にチップは即座に答え、直ぐに部屋へと走っていく。チップを始めとするハーFRINGという種族は、その小柄な体格

故筋力が著しく低い。

そのため、何の武器も道具もなしでは戦えない。

一方、新一は素手でも、その戦闘力は正規軍の歩兵一個大隊を上回る。

何が相手かは知らないが、大概の相手は叩き潰せる。

そう考えた新一は、すぐさま店から飛び出していく。

何が起こったかは知らないが、この世界での我が家を壊させるわけには行かないのだ。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（4）

「なんだこりゃあああああ！？」

外に飛び出した新一は開口一番にそう叫んだ。

目の前に常識ではありえない光景が広がっていたからだ。

町は襲われていた。

6本の足と2本の触覚、そして発達した大顎を持つ細長い身体の昆虫だ。

新一の知る限り、その姿は蟻のようであった。ただし、大きさが尋常ではない。

その体躯はまるで牛のような大きさであり、通常の蟻とは根本的に別物であった。

しかもそれが、町のいたるところで暴れている。

襲われている人々もあり、阿鼻叫喚が町のいたるところから聞こえる。

見れば、銀の穂先亭に体当たりを仕掛けている個体が2体いる。

壁は破損しかかっており、突き破られるのも時間の問題のようであった。

「ぶっ殺すぞ、この虫けらどもお！」

そう一声叫んで、新一は巨大な蟻に突進する。

そして、その蠢く足の一本を掴む。

その瞬間に、蟻は敵対者の存在に気がついたように首を新一の方へ向ける。

だが、もう遅い。

「うおりゃあああああああああああああ！！」

裂帛の気合とともに、新一は背を逸らし、足を掴んだまま身体を回転させる。

すると、蟻の身体は地面を離れ、空中へと浮き上がる。

そして、仰角15°程度で空中へ放り投げられ、少し離れた地面へと激突した。

途中で足が千切れ、フルスイングはできなかったがそれでも十分な距離に投げ飛ばすことができた。

新一はその勢いに乗ってもう一体に向かう。

蟻は新一の方へ向き直ろうとするが、それより先に新一の前蹴りが炸裂する。

バキィ！

サッカーボールを蹴るように放たれた前蹴りは、蟻の胴に命中し、硬い外骨格にヒビを入れ、その巨体を宙に舞わせる。

グシャ！

蟻は5m程吹っ飛ばされた後、背中から地面に落ち、少しの間もがいた後動かなくなった。

「ざまあみろ！」

敵を撃退した新一は得意気に言い、倒した蟻達に視線を向ける。

「新一！大丈夫かい！？」

銀の穂先亭の中からチップが姿を見せる。

右手には両刃の銀のナイフ。左手には投石器を巻き付けている。身体には所々金属板で補強してあるレザーアーマー。それが冒険者としてのチップの装備だった。

そして、身体の後ろには麻布でできたサイドバッグを下けている。その中には爆弾や目潰し玉等の多様な道具が入っていた。

「俺は大丈夫だ。店を襲ってたのも潰した。だが…」

チップにそう言いながら、新一は町の方へ視線を向ける。町の中ではまだ巨大な蟻達が暴れまわっている。未だ町全体への危険は去ったわけではない。

「行くぞ、チップ。リイナさんを助けなくっちゃならねえ」

リイナがまだ帰らない理由はどう考えてもこの蟻が原因だ。襲われているとすれば、一刻も早く救助しなくてはならない。

「そりゃまあそうだけど、新一はいいのかい？」

「…なにがだよ？」

チップの言葉の意図を測りかねて、新一は尋ね返す。リイナは新一にとって恩人の一人だ。その窮地を助けるのに理由など要らない。

「姫様も襲われてるかもしれないよ、蟻達にさ」

チップの言葉に、新一は齒を噛み締める。

確かにリミアが襲われている可能性はある。

だが、新一は軽く首を振った後、自身の迷いをかき消すように言う。

「… 姫は本人も結構な使い手だ。それに屋敷には護衛もいる。後回しでもいいだろう」

リミアは一流の魔術師である上、剣術や体捌きも人並み以上である。

もちろん、大勢に囲まれると危険ではあるが、今は非戦闘員のリイナの救出が先だ。

新一は状況的にそう判断した。

「… そうだね。なら、急ごう」

新一の心中を理解し、チップはリイナがいると思われる造酒所の方へと駆け出す。

新一の判断は正しい。だが、内心ではやはりリミアを自身の手で守らないと安心できないだろう。

そう考えたチップは一刻も早くリイナを確保しないといけないと考えたのだ。

「新一の足元がそわそわしているし、ね」

「ぬかせ」

軽口を叩くチップの頭を平手で軽く叩いて、新一は駆け出す。

新一はこの町と、そして自分を受け入れてくれた人々を助けたい。例え、今感じている世界が現実であろうと、臨死体験中の夢の産

物であろうと。

この町はこの世界での故郷であるのだから。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（5）

「…まじか、あれ」

町を駆けて行く新一が見たものは、想像を絶する光景であった。
町の中央にある公園。

そこは簡素ながらも噴水や公園、樹木や花壇の設置された町の人々の憩いの場であった。

そのど真ん中に巨大な穴が開いている。

そして、その中からは件の巨大蟻が際限なく這い出てきていた。

「どうするのさ、新一！？」

あまりの光景にチップが気押しされながら言う。

蟻の数はどうみても30体を上回る。しかも、穴の様子から見て総数はそれどころではすまないと分かる。

「…元を断たないとどうしようもないだろう」

苦々しそうな顔で新一は言う。

このまま際限なく穴から蟻が出続けると、町が完全に占領されてしまう。

「チップはリィナさんを探してくれ。その後、姫と合流して町にいる蟻を掃討してくれ」

この様子から見て、町に蟻は100体以上いる。自分以外でそれを掃討できる戦力は、この町唯一の魔術師であるリミアしかないだろう。自警団や冒険者達ではどうにもなるまい。

「分かった。きっちり塞いで来てくれよ！」

チップは新一の言葉に素直に従い、当初の目的地であった造酒所の方へと駆けていく。

あの蟻が相手では、自身はたいした戦力にはならない事を理解しているからだ。

それよりは、リイナの無事を確保し、この現状をリミアに告げて新一の応援に来てもらう方がいいのだ。

「…さて、行くか」

そう言つて、新一は両の拳を胸の前で打ち合わせ、蟻どもの巢めがけて突撃する。

正直、自身の手にも負えるかどうか微妙であった。何せ数が多過ぎる。

だが、やるしかない。あんな虫どもにこの町を蹂躪させるわけには行かないのだ。

まるで旋風のように新一は駆けていき、公園に突入する。

その瞬間、蟻達の顔が一斉に新一の方を向く。

そして、憎き仇敵を見つけたかのように一斉に殺到する。

「なんだこりゃ!？」

奇怪な蟻の行動に新一は驚く。

先ほど、新一が蟻を倒したとき彼の体に蟻の体液が僅かに付着していることを新一は知っている。

だが、それが敵の攻撃本能を刺激するフェロモンを放っていることを新一は知らない。

「…まあ、好都合だけだな」

軽く肩を竦め、新一は言う。

正直、町へ行かれるよりは自分に殺到してくれた方が気が楽だ。

数体の蟻が新一に殺到する。そして、一体がその大顎で胴に食らいつこうとする。

新一はそれを垂直飛びでかわし、大きく持ち上げた踵を落とす。

グシャ！

蟻の外骨格が割れ、頭が潰れる。

そして、溢れた体液が新一にかかり、蟻の攻撃性はますます増していく。

「くそつたれ！！」

新一は悪態をつきながら背後から迫ってきた一体に後ろ蹴りを見舞い、宙にふっ飛ばす。

そして、すかさず目の前の蟻の懷に飛び込み、パンチを見舞う。たった一秒の間に数体の蟻が宙を舞い、どんと蹴散らされていく。

だが、新一の殲滅速度を超えるペースで穴から蟻が際限なく現れ続ける。

また、蟻は虫らしく異様にしぶとく腹を潰した程度では戦闘力を失わず新一に襲い掛かって来る。

更に、接近せずに口から毒を吐きかけてくるものまで現れ始めた。味方を巻き添えに放たれる毒液をかわしきることはさすがに新一にも不可能だ。

ベシヤ！

ついに新一は頭からまともに液をかぶってしまつ。
薄緑色のその液は強い酸だ。

「ぐううう！！」

身を焼かれる感覚に、新一は蟻を蹴散らしながら呻き声をあげる。
新一の皮膚は異様に強靱で、少々の酸など物ともしない。現にその皮膚が爛れたりはいしていない。

それでも、何度も吐き掛けられればダメージは蓄積する。

「…畜生。きりがねえ」

新一は肩で息をしながら、自身に遅い来る蟻と体液の雨をかわし続ける。

かなりの数を殲滅したはずだが、蟻の数が尽きる様子はない。
このままでは、先に新一の体力が尽きてしまう。

（くそっ！負けてたまるか！！）

折れそうになる自身の心に鞭を打ち、新一は再び蟻と向かい合い、蹴りを入れようとする。

その瞬間、蟻達に異変が起こった。

蟻の足元に氷が現れ、それが瞬く間に蟻を多い尽くしてしまった。
見れば、地面は白く輝き霜が降りている。

霜はどんどん範囲を広げていき、蟻を飲み込み凍りつかせていく。

そして、霜は穴にまで到達する。

霜は厚い氷の壁となり、穴を塞ぎ、更に範囲を広げ蟻達を飲み込んでいく。

「こいつは一体…」

不思議な光景に、新一が立ち尽くしていると、

「おはようございますう、新一さん」

頭上から妙に間延びした女性の声が聞こえた。
それは、聞いたことのある女性の声。

「…お前か、ミーティア」

声の主の名を呼び、新一は頭上を見る。

「はあい。お久しぶりですう」

簾にまたがって宙に浮き、そう言つて能天気な笑顔を見せるのは、いかにも魔法使いな雨傘のような縁を持つ黒いとんがり帽子と濃紺のマントを身に纏う眼鏡の少女。

髪の毛はややピンクがかったプラチナブロンドであり、その目はルビーのように赤く、その肌は雪のように白い。それは彼女が生まれながらに色素欠乏症であることを示していた。

ややたれ気味の目が特徴の顔立ちはやや幼さを感じさせるが、その豊かな肢体は十分に成熟した大人のものであった。

彼女こそアヴァロンでも随一と言われる才能を誇る、若き宮廷魔術師ミーティアであった。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（6）

「なんとかあ、片付きましたかねえ？」

「…だといんだけどな」

街角に残っていた蟻の残党を討伐し、新一とミーティアは言葉をかわす。

ミーティアに穴を塞がれ、広範囲の攻性魔法で蹴散らされていく蟻達はものの半時間ほどで町から姿を消した。

新一もかなりの数を蹴散らしたものの、ミーティアの魔法に焼かれたり凍てつかされたりした蟻の数のほうが遥かに多い。

しかも、この女魔術師は広範囲魔法を乱戦に打ち込んで味方を巻き込まない、ということをやつつてのける。

敵の存在事象を云々かんぬんという説明をいつか聞いた気がするが、難しすぎて新一にはさっぱり理解でいなかった。

とりあえず、かなりの高等技術であることは理解できたが。

「でも、お前が来てくれて助かった」

新一は胸の内を素直に打ち明ける。

正直、ミーティアが来てくれなければ、危なかった。

今頃自分は蟻共の餌となり、町は蟻の餌場となっていただろう。

「ふふふ、いいんですよ。新一さんのためですものお」

新一の言葉に、ミーティアは少し照れくさそうに返す。

その雪のように白い顔の顔が微かに朱に染まっているようにも見

える。

「でも、こんな片田舎にどうしたんだ？何か、面白そうな遺跡でも近くで見つけたのか？」

新一が世間話のような調子でミーティアに尋ねる。

彼女は今宮廷魔術師全体の副長候補であり、いずれは長に選ばれと目されている人間だ。それ故、多忙であり用件もないのに帝都から離れた片田舎にやって来るのは珍しい話だ。

「3日程休暇をいただいたのでえ、新一さんに会いに来たのです。少し前に珈琲豆を手に入れましたし」

「そいつは光栄至極だな」

微笑んで言うミーティアに新一は少しおどけた調子で返す。

ミーティアは新一の淹れた珈琲が殊の外お気に入りだ。その為、時々珈琲を手に入れると新一のところへ持ってきて一緒にテーブルを囲む。

珈琲を淹れる腕を買ってくれている事は料理人として光栄であるし、またミーティアのような美女が自分の所をわざわざ訪ねてくれることは男として光栄である。

近年急速に実力をつけていたこの美しい天才魔術師に言い寄る貴族の子弟は多い。だが、ミーティアは悉くそれを蹴っている。

『ああいった軽薄な殿方はあ、信用できません。コンソメスープで顔を洗って5百年後に出直してきやがれ、ですう』

いつかミーティアはウンザリした顔で新一にそう語った。

過去に何があったか知らないが、ミーティアはかなりの男嫌いで

あるという。

そんな彼女に慕われているのなら、どんな男でも嬉しい筈だ。結構な優越感に浸れる。

「でもお、どうしてこんな所に蟻たちが現れたんでしょうねえ？」

地面に転がる蟻の死骸を一瞥し、ミーティアは言う。

「どういうことだ？」

「ええとですねえ」

疑問を抱く新一に、ミーティアは説明を開始する。

「この蟻はマローダー・アントと言いましてえ、ジャイアント・アントの中でも最も凶暴な種類なんですう」

「…そいつは大層な名前だな」

ミーティアの説明を聞き、新一は苦笑して言う。

確かにこの蟻どもの暴れっぷりを見るに、『略奪者』の名前は実に妥当であると思われる。

「でもお、彼らは結構デリケートでしてえ、通常人里周辺に巣なんて構えたりしないんですよ」

ミーティアの説明を聞き、新一はなんとなくだが納得する。

確かに蜂の中でも最も凶暴なオオスズメバチも警戒心が強すぎるため、人里周辺で巣を構えることはまずない。恐らく、それと似たような感じなのだろう。

「でも、現に構えているじゃないか」

「そうなんですよねえ……」

新一の言葉にミーティアは唇に右の人差し指を当て思案する。

「……とりあえず、今後のことはあ、町長や姫を交えて話し合う必要がありますう」

「……そうだな」

ミーティアの言葉に新一は頷く。

今回のことは町全体の危機だ。姫や町長を交えて今後の方針を決めなくてはならない。

「姫の館に行きましょう。まずはリミア姫にご挨拶しませんとお」

宮廷での発言力はミーティアの方が上であろうが、身分としては家臣に当たる。

近くに来たのなら、まず礼をするのが慣わしだ。例え、訪問がプライベートであっても。

「そうだな。姫もミーティアに会えれば喜ぶだろうし」

ミーティアはまだ帝都にいた頃のリミアに魔法理論を教えていた。所謂教師と生徒の関係である。

性格的にも相性がいいらしく、帝都に出かけた際には必ず一緒にお茶をする仲だ。

「じゃあ、行こう」

「はいですう」

言葉を交わし、二人はリミアの館へと歩みだす。

ミーティアの様子はいつものように能天気そのものであるし、暢気に挨拶をしに行く事を考えるなど、彼女はこの事態をさほど深刻に捉えてないように新一には思えた。

その強大な魔力故に万余の軍勢と比較されることすらある彼女の力をもってすれば、蟻の群れごと軽く始末できるからだろう。新一はそう考えていた。

だから、微かに俯くミーティアの表情がいつになく暗いことに気がつかなかった。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ!!（7）

「町を放棄するだつてえ!?!」

リミアの屋敷の会議室に新一の叫びと、目の前の長机を両手で叩く音が響く。

その新一の言葉に、数mの距離を隔てて対面側に座るリミアの隣のミーティアが神妙に頷く。

「なんでだ、ミーティア!?!あんな虫どもなんて始末してしまえばいいだろう!?!」

納得できない新一は声を荒げて言う。

新一としては対策を立てて、あの虫どもを掃討するものだと思っていた。

それなのに、戦いもせずに逃げる算段をするなど到底納得できるものではない。

「...どうやってですかぁ?」

そんな新一に、ミーティアは冷めた口調で言う。

「地下数10mにも及ぶ巣穴に入って、1000体を優に超える蟻たちを掃討する術がありますかぁ?私はぁ、かなり難しいと思いますけどぉ?」

「っ!だが!」

冷静に言うミーティアに新一はなおも食って掛かろうとする。

「よしなさい、新一」

それをリミアが言葉で制する。

「ミーティアも好きでこんな事を言っているわけではありません。冷静になりなさい」

リミアにそう言われ、新一はしばらくミーティアの方を見た後、納得できない面持ちのまま席に着く。

ミーティアの言うことはきっと正しいのだろうが、新一にはとても納得できない。

この世界の新一の故郷とも言えるこの町を放棄するような決断など到底受け入れられない。

「なんとかならないのかよ、ミーティア」

新一の隣に座るチップもまたミーティアに抗議する。

リイナを保護し、リミアの館に駆けつけた彼も新一の仲間ということでこの会議に参加していたのだ。

「ジャイアント・アントなら女王蟻を殺せば無力化できるはずだ！巣穴に突入して、倒してしまえば……」

モンスターに関する知識の豊富なチップが対策を提案する。

ジャイアント・アントは一般的に女王が存在しているからこそ動けるのである。

女王が万一死ぬようなことがあれば、蟻全体にフェロモンを介してそれが伝わり、次の女王を育てるために一目散に逃げ出すはずである。

「…現実的ではないですねえ」

だが、チップの案をミーティアによって却下される。

「巢の最奥にいる女王の下に辿り着くためには結局巢穴全体の蟻達を蹴散らさねばなりません。そんな戦力は我々にはありません」

ミーティアの言葉を聞き、新一は奥歯をかみ締める。

新一の力をもつてしても、数10体の蟻を相手にするのが限界だ。ミーティアや姫、他この町の冒険者を全員集めても太刀打ちできない。

「この巢を殲滅するには地方駐留軍の大半を動員する必要があるかもしれませんが、リスクとリターンが釣り合いませんし、手続きを待つ時間もありませんよお？」

このラグニア地方の都ウィンディアには約一万の軍が常備軍として駐留している。

また、それを指揮する女騎士パオラは大陸最強の騎士と詠われる英傑である。彼女が軍を率いて戦えば、蟻どもを殲滅することも可能だろう。

だが、動員する費用と想定される被害も大きく、片田舎の町一つの為にやすやすと動けるかどうかは分からない。

また、千人規模の軍を動かすには、よほど火急の事態でもない限り皇帝の許可が必要だ。手続きには早くとも5日はかかる。

一方、巢穴を封じているミーティアの氷結界はどんなに頑張っても1日もたせるのが限度であるらしい。とても間に合わない。

「じゃあ、攻性魔法で巢ごと吹き飛ばす、とか」

「無理ですう」

チップの提案をミーティアは再び即答で否定する。

「地下50mにも及ぶ巣を破壊するには戦略級攻性魔法を使う必要がありますけどお、そんなの私と姫だけではとても扱えません」

戦略級攻性魔法とは、一つの山すら吹き飛ばす程の破壊力を持つ大規模な攻撃魔法である。

その破壊力は絶大で、過去の大戦で使用された時には周辺地域の地形や気候すら変化させてしまったと言われる。

現在は戦争での使用は国際法で禁じられており、その他の場合でも首脳会議での承認がなくては使用できない。

また、要求される魔力も通常の魔術師なら100人以上のものが必要である。いかにミーティアやリミアが優れた魔術師でも到底足りない。

「…八方塞りというわけですか」

新一の右手側に座る初老の紳士・この町の長がため息をつく。

ミーティアの力を持ってしてもどうにもならないこの事態に絶望感を味わっていることは明白だ。

「…姫、ご決断を」

硬い表情で、いつになく深刻な口調でミーティアはリミアに言う。
この場合、町の放棄を決定する権限はリミアにはないが、町長は既にその意思を固めている。

後はリミアが意思を決めれば、決定する。

「…分かりました、ミーティア…」

俯き加減に、感情のこもらない表情でリミアが頷こうとした時、

「待ってくれ、姫！ミーティア！」

新一の叫びがリミアの声を掻き消した。

「新一…」

戸惑った様子でリミアが、立ち上がって叫ぶ異世界からの来訪者を見る。

「俺は…嫌だ！姫と出会ったこの町を捨てるなんて御免だ！」

「ですけどお…新一さぁん…」

沈痛な表情でミーティアが言う。

新一の気持ちは分かる。だれでも、故郷を放棄するなんてお断りだ。

だが、世の中には理不尽にもどうしようもないことがある。

せめて、パオラが軍を率いて現れるまで町全体で避難しなくてはならない。さもなくば、後1日と数時間で町を枕に全滅である。

その事を説こうと、ミーティアが口を開きかけた時、

「頼む！納得できるまでやらせてくれ！手と知恵を貸してくれ！」

両手を机について頭を下げる新一を見て、言葉を失った。

「…やってみましょう、ミーティア」

新一の様子を見て、穏やかに微笑みながらリミアは言う。

「まだ結界は維持できるのでしょう？やれるだけやって、駄目だったら逃げましょう」

「…姫の仰せのままに」

リミアの言葉を受け、ミーティアは一礼をする。
そして、顔を上げた新一を見て言う。

「この状況を打破するにはあ、巢に忍び込んで女王蟻を倒すのが一番現実的だと思いますう」

蟻全部を相手にするのは到底不可能である以上、ピンポイントで女王蟻を始末するしかない。

もちろん、女王との交戦中に他の蟻も向かってくるだろうが、倒す時間が短ければ交戦は最小で抑えられる。

「問題はどうかやって忍び込むか、ですが…」

そう言ってミーティアは首をひねる。

蟻たちは視覚と触覚によって他者を感知する。

マローダー・アントの触覚は非常に鋭敏であり、臭いや空気の振動など複数の要素を感知できる。

インヴァジビリティ
『姿隠』魔法もあるが、これでは蟻の感覚を誤魔化す事は不可能だろう。

どうするか、新一たちが悩むなか、

「あのさ、」

チップが席を立ち、挙手して言う。

「おいらにいい考えがあるんだけど」

そう言うチップの表情は取って置きの悪戯を思いついた子供のようであった。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（8）

漆黒の闇が支配する地底。

見渡す限りの闇の中を2つの光が進んでいく。

一つはこの世界に本来ない科学の力であるLEDによって生み出された白い光。

もう一つは魔法で生み出された橙色の光。

前者を物のが新一で、後者を持つのがリミアである。

その洞窟内を這い回るモノの気配が数えきれない程ある。

それは牛ほどの大きさのある蟻であった。

新一達はその内の一体に跨がって、洞窟の奥を目指していた。

奥に進んでいく気配の蟻を見繕いながら、時々乗り換えつつ。

そうでもしなければ、ほぼ垂直に切り立った部分が多いこの洞窟を進んでいくには無駄な労力がかかる。

「…しっかし、襲われないもんなんだな」

蟻の頭部の後端に跨がる新一は感嘆混じりに言った。

「思いついたチップもやるけど、短時間でこんなの作ったミィーティアも大したもんだな」

「そうですね」

新一の腕に抱えられたリミアが新一に同意する。

「ただ、この臭いだけは勘弁して欲しいですね」

「まあな」

橙色の光の中で、二人は苦笑する。

新一とリミアは蟻の体液から作られた、酸っぱい臭いのする軟膏を身体に塗りたくっている。

チップ曰く、蟻達はお互いをフェロモンのようなもので識別しあっているらしい。

そして、ミーティアに倒した蟻の体液からそれに似たものを作れないか、と言ったのだ。

「調子はどうですかあ？」

リミアの手の中にある、淡く輝く青いビー玉のようなものからミーティアの声がする。

それは通話石という魔法アイテムである。

青と赤で一对になったそれは、かなり離れた場所でも通話できる、いわばトランシーバーのようなものだ。

「問題ない。蟻どもが襲ってくる気配はないな」

「それはよかったですう」

新一の言葉に、ミーティアが嬉しそうな声で答える。

ミーティアとしても、たった2時間で作った軟膏の効能を信頼しきっているわけではなかったらしい。

効果が期待通りであって、胸を撫で下ろしている所なのだろう。

「新一さんとはかくう、姫様に何かあつたらあ、私の首が飛ぶところでしたからあ、安心しました」

「…俺はどうでもいいのかよ」

ミーティアの言い草に新一は苦笑交じりに答える。

今回の作戦は巢の奥深くまで忍び込み、女王を大規模攻性魔法で一気に仕留めるというものである。

故に主役はリミアであり、新一は万が一の時の護衛でしかない。

だが、皇位継承権から遙か遠いとはいえ、皇族であるリミアを危険に晒すのは、ミーティアにとっても危険な賭けであった。

もしも、リミアが命を落とす事になれば、文字通り彼女の首が断頭台で飛ぶだろう。

「だったら、姫じゃなくてお前が来ればよかっただろう？」

「本当はそうしたかったですけどねえ」

新一の言葉に、今度は水晶玉の向こうでミーティアが苦笑する。

攻性魔法の使い手としては、リミアよりミーティアの方が遙かに上である。

だが、リミアより一回り大きなミーティアの全身に塗るほどの軟膏の分量がなかったのだ。

「ではあ、私は氷結界の維持に戻りますからあ、よろしくお願ひしますねえ」

その言葉を残して水晶玉の光が消え、通信が途絶える。

「言われなくても、姫は守るさ」

新一は水晶玉をポケットにしまい、腕の中のリミアを見下ろす。リミアの身体は小さく、華奢である。比較的体格のいい新一に抱

えられていると、まるで本当の人形のように見える。

「…あの、新一」

新一に見つめられ、リミアは少し居心地が悪そうに身じろぎする。

「ずっと抱えられてないといけませんか…？」

リミアとしては、新一に抱えられたままの格好が少し恥ずかしいのだろう。

だが、新一はこのままの姿勢を変えるつもりはない。

なぜなら、

「わっ」

身体が横から重力に引かれる感覚に、リミアが思わず声を上げる。今蟻は垂直の壁を降りて行っている。

新一は股に力を入れ、蟻の首を両足で強く挟み落ちるのを防いでいる。

同時に、リミアを抱える腕にも力を入れ、リミアを落とさないようにする。

怪力を誇る新一なら、この程度のことは大した手間にならない。

だが、常人では跨ったままの姿勢を維持することすら難しいだろう。故にリミアを蟻の背に乗せられないのだ。

「…なんだか、昔を思い出すな」

腕の中のリミアを見て、新一が呟く様に言う。

「昔？」

見上げて尋ねてくるリミアに、新一はああ、と頷く。

「…昔、山登っている時に妹が足を挫いてな。抱えて帰ったことがあるんだよ」

新一はそのときのことを思い出し、苦笑する。

数年前のゴールデンウィークの時の事だった。

新一は山に出かけている親友に会いに行く、と日本アルプスに行くと言つてきかない妹に同行したのだ。

当時小学生であった妹は、山に慣れていないせいもあり登り始めて数時間も経たず足を挫いて歩けなくなった。

新一は仕方なく、彼女を抱えて山を降りたのだった。

「あいつは姫程お淑やかじゃなかったけどな」

『放せ、馬鹿兄貴！ 恥ずかしいじゃないの！！』

顔を真っ赤にして腕の中で暴れる妹の声を新一は思い出す。

そうやって騒ぐと余計に人目を引くぞ、と言つとりあえず大人しくなったものの、山を降りた後もむくれたままの妹はその後3日は口をきいてくれなかった。

新一はポケットから手の平サイズの黒いものを取り出す。

それは、折りたたみ式の携帯電話だった。

それを指で弾いて開くと、待ち受け画面には、高校生くらいの年齢の黒いセミロングの髪、快活そうな容姿の少女が映っていた。

それは新一の妹、永石要であった。

「…また、会えるといいですね」

リミアは穏やかに微笑んで言う。

それはつまり、元の世界へ返れるといいですね、と言っているのだ。

「…そうだな」

そう言って新一はポケットに携帯電話をしまう。

そして、無意識に胸ポケットに伸ばす。

そこには一昨日新しく買ったばかりの煙草が入っていた。

「駄目ですよ、タバコは」

新一の意図に気がついたリミアがその手を押しとどめる。

虫は煙草の匂いを嫌う。

故にもし煙草を吸うと敵として認識される可能性がある、とミィーティアが言っていたのだ。

「…わかってるよ」

新一は苦笑して手を引つ込めた。

本気で吸うつもりではなかったのだが、つい癖で手が伸びたのだ。

そういえば、要にもよく煙草を取り上げられていた。

彼女は父と自分が煙草を吸うのを嫌っていた。

今彼女はどうしているのだろうか。

両親が離婚し、彼女が母の実家に引越してからほとんど会っていないが、メールでのやり取りは頻繁に行っていた。

話によると、モデルの仕事も順調で特に不自由なく生活しているとの事だが…

「帰らないと、な」

新一は呟くようにそう言う。

そう。新一は帰らないといけない。元の世界へ。

たとえ、大した愛着がなかつと。たとえ、ろくな思い出がなかつと。

きつと、妹はまだ自分を待っていてくれるはずだから。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（9）

巣穴に入ってからどれほどの時間が経っただろう。

巣の最奥と思しき大きな空洞にそいつはいた。

「でかいな……」

新一はその巨体を見上げながら呟く。

それはこの巣の女王と思しき蟻だった。

頭部にまるで冠のような赤い飾りと、10m近い長大な腹部がある以外は、他の蟻とあまり大差はない。

だが、その大きさは桁外れであった。

他の働き蟻が牛だとすると、この女王はまるで恐竜のようであった。

実際、博物館で見たティラノザウルスの骨格模型と同じような大きさではないかと思える。

「さすがの新一さんもこれを相手にするのは難しいですね」

新一の隣に立つリミアが苦笑して言う。

「やってみなきゃわかんねえだろ？」

少しむっとした表情で新一が言う。

別に自身の強さを誇りたいわけではないが、リミアにそう言われると訳もなく苛立つ。

自身にはこの姫に強いということ以外で恩を返す手段を知らないからだろっ、と新一は思う。

どんな敵からでも姫を守って見せる、と誓った手前少し意地になっているのだろう、と。

「まあ、ここは私に手柄を譲ってください」

リミアは悪戯っぽく新一に微笑んだ後、女王蟻の方へ向き直る。一方の女王は一介の働き蟻に擬態しているこちらには目もくれない。

「…恨みがあるわけではないですが…私達にも明日は必要なんです」

リミアはそうつぶやいた後、呪文の詠唱に入る。

「怒れる炎の巨神の名の下に、我、破滅の魔の杖を手にとらん…」

新一には分からない魔法言語でリミアは呪文を紡ぐ。

そして、両手を広げ、身体を回転させながらステップを踏む。

今、リミアが詠唱しているのは『終焉乃焰』ラグナロクと呼ばれる魔法だ。

戦術レベルでは最強の攻性魔法であり、凄まじい熱線と爆風で、小さな砦一つ程度なら一撃で跡形もなく吹き飛ばせる。

常人の魔力では扱うことができず、普通は魔法使い一個分隊が協力して扱うものだが、リミアの並外れた魔力と炎への親和性は単独での行使を可能にしている。

しかも、今はミィティアから受けた『スキルワイヤー技術付与』の魔法により、ターゲットの任意選択も可能になっている。

やがて、踊り続けるリミアの手に炎が纏われる。

炎は闇の中で輝線を描き、それがリミアの身体にまとわりつく。その様子は、さながらリミアが炎と戯れているようにも見える。

その炎に気がついたのか、女王がリミアの方へ首を向ける。
来るか、新一の手が背中 of 巨大な戦棍に伸びる。

（来たけりやこい！片っ端からぶっ飛ばしてやるぜ！！）

女王を睨み付けながら、新一は心の中で唸る。

不思議なことに、新一の心はこんな化け物を目の前にしてもまるで怖気づくことを知らない。

むしろ、本当は敵ではないようにさえ思える。

自分はそんなにもリミアの言葉に意地になっているのだろうか？
そう思うと、実に滑稽だ。笑いすらこみ上げてくる。

自分がまさか、この忌むべき力を否定されて不愉快に思うなど、
思いもしなかった。

だが、女王も他の蟻もそれ以上のリアクションはとらない。

まだ、こちらを仲間だと思っているのだろうか？

だが、その間に呪文は完成する。

彼らを全滅させる、炎の魔法が。

「終焉の焰の宴に、神も、魔も、ここに滅せよ！！」

リミアの裂ぱくの叫びとともに、呪文は完成する。

その瞬間、リミアの手に巨大な焰の槍が生まれる。全長10mを
超える赤い二又の槍が。

リミアがそれを投擲すると、槍は狙いを変わらず蟻の女王の胸に突き刺さる。

次の瞬間、槍が爆裂した。

視界を埋め尽くす紅蓮の炎と凄まじい爆風が撒き散らされ、洞窟

内を蹂躪し、蟻たちを飲み込んでいく。

洞窟内の岩壁が崩壊し、巨大な瓦礫が降り注ぐ。

幸いそれは、二人には当たらず、炎も爆風も二人を傷つけることはない。

「…すげえな」

新一はその様子を見て、呆氣にとられる。

リミアの攻性魔法を見たのはこれが初めてではない。

だが、ここまで規模の大きなものを見たことはない。

これでは本当に大量破壊兵器のようだ。新一の世界の爆弾でも世ほどの物でなくてはここまでの破壊力はない。

しかも、ミーティアに至ってはこれを上回る破壊力の攻性魔法を自身の手足のように操る。

彼女が本気で魔力を開放すれば、10万の軍勢すらものの一時間で灰燼に帰すといわれる。

それに比べれば、自分の暴力など大したものではないように思える。まさに螻蛄の鎌のようなものだ。

「…上手くいきましたね」

肩で息をするリミアが、新一の方へ顔を向ける。

その顔は普段にも増して白い。また、表情も笑顔である物の疲れが見えている。

流星のリミアにとっても、終焉の焰はかなりの負担になったようだ。

「大丈夫か、姫？」

新一は今にも倒れそうなりミアの肩を支えてやる。

リミアは何も言わず、それに背を預けた。

「…これで終わりですね」

「…ああ、そうだな」

今もまだ燃え盛る業火の中で、二人は寄り添う。

この炎が晴れる頃には、騒ぎの元凶である女王は消え去り、蟻達はこの町から逃げ去るはずだ。

それでこの騒動は終わる。

そのはずだった。

新一は咄嗟に察知する。

自身と姫に迫る危険を探知する。

「姫！」

新一は咄嗟にリミアを左に突き飛ばす。

次の瞬間、炎を切り裂くようにして、まるで死神の鎌のような巨大な鉤爪が振り下ろされる。

それは新一の胸に当たり、それを袈裟切りに引き裂いた。

並みの鎧よりも強靱な新一の皮膚を易々と。

「くっ！」

後ろに飛びながら、新一は呻く。

咄嗟に跳んだおかげで両断はされなかった。

だが、着地した新一は胸の痛みのせいで片膝をついてしまう。

抑えた右手を赤い血が濡らす。どうやら、思いの外傷は深いよう

だ。

「新一！」

新一の様子を見たリミアがよろめきながら立ち上がり、駆け寄ろうとする。

「来るな、姫！」

リミアを制する言葉とともに、伸ばされた新一の左腕が、

ズバッ！

再び振り下ろされた爪によって切断され、宙を舞った。

「ぐうう…くそっ、生きてやがったか…」

血が吹き出る腕の切断面を握り締めながら、新一が呻く。

「生きてる…？」

リミアが呟くとともに、魔力が消え炎と煙が消える。

その中から姿を現したのは、その目を赤く輝かせた巨大な蟻の女王。

その右腕のような前足と思しき場所には、新一の身体を切り裂いた長大な爪が携えられている。

その身体に損傷はほとんど認められない。

「そんな…終焉の焰は直撃したはずなのに…」

その姿を見て、愕然とリミアは呟く。

終焉の焔を受けて無事でいられる生物がいるなど考えられない。
地上最強の生物ドラゴンですら、傷を負うであろう。

「姫、すぐに逃げてください！」

新一のポケットの水晶球が輝き、声を発する。

いつになく切羽詰ったミーティアの声は、何らかの手段でこちらの状況を把握しているからだと思われる。

「恐らく、そいつは魔力をほとんど受け付けない変異種ですう！
我々の手には負えません！すぐに転移石を握り潰して逃げてくださ
あい！」

ミーティアの言葉を聞き、リミアはポケットに手を伸ばす。

その中に入っているのは六角形の琥珀色の宝石。

それは転移石という魔法の品物である。

子供の力でも握り潰せる脆い石であるそれは、潰すと同時に予め
設定されている位置までワープさせてくれる代物だ。

いざというときのために、新一とリミアに一つずつ渡されていた
のだ。

だが、リミアがポケットに手を入れる前に、女王の大鎌がリミア
に振り下ろされる。

空気を切り裂き、音に迫る速度で死神の鎌がリミアの命を断ち切
らんと迫る。

キーン！

間一髪で、鎌は金属にぶつかり止った。

「…無事か、姫？」

齒を食いしぼりながら、くぐもった声で新一は背後にいるリミアに尋ねる。

女王の鉤爪は、リミアの前に立ちはだかった新一が右手一本で持った戦棍に止められていた。

「新一…」

「…姫は俺が守る。例え、どんなが相手でも」

齒を食いしぼりながら、新一は女王の一撃をこらえる。

だが、それはあまりに無謀な勝負だった。

臂力は女王の方が上だ。しかも、今の新一には右腕一本しかない。また、切断された左腕と、切り裂かれた胸から流れ出す血と共に、新一の力はどんどん失われていく。

「…っ！ちく…！しょう…！！！」

新一は悪態をつきながら齒を食いしぼる。

だが、新一の腕は徐々に押されていく。

やがて、失血のあまり腕や足が震え始め、意識が暗くなっていく。

（こんなに…無力なのか、俺は…）

背中にいる姫の存在を感じながら、新一は思う。

この姫はきつと転移石を握り潰せない自分を見捨てて逃げたりはしない。たとえ、このまま心中することになっても。

なんとしても、守らなければならない。こんなところで、彼女を

死なせるわけにはいかない。

だが、どう心の中で叫んでも自身の身体に力は入らず、やがて感覚は消えていき、

そして、全てが闇に包まれた。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（10）

声が聞こえた。

いつか、聞いたあの声が。

あれは3年前の夜の山道。

要を人質に取った卑劣なチーマーどもは、抵抗できない新一をチ
エーンで縛り、バイクで山道を引きずり回したのだ。

もちろん、そんな程度でそう簡単にくたばる新一ではなかった。

だが、流石にそれも数時間に及ぶと、意識が薄れ始めるほどの重
傷を負った。

失われる意識の中、新一が見たのは併走する車の中で、縛られた
要が服を脱がされていく姿。

その後の展開は誰にでも予想がつく。

（こいつら…殺す！絶対に！！）

新一の意識が怒りによって真っ白に染められたとき、その声は聞
こえた。

（リミッター解除。バーサーカーモード起動）

声が聞こえた瞬間、新一はその目を開いた。

その瞳の色はまるで血のような紅。

次の瞬間、信じがたいことが起こった。

左腕から吹き出ていた血が、失われた新一の腕を形成し固まる。
やがて、固まった血が弾け、その中から新たな腕が現れた。

それは今地に落ちているそれと寸分変わらぬ、新一の腕そのもの。

「新一……？」

常識的にはあり得ない状況を見て、リミアが絶句する。

だが、新一はそんなリミアを省みることもない。

そして、再生した左腕で女王の鎌を掴む。

新一の手がかすかに切れ、血が鎌に付着する。

その次の瞬間、鎌は前足ごと血が付着した部分から、まるで砂山が崩れるかのように分解され、細かい粒子になって地に落ちた。

唐突に前足を失い、女王はうろたえる様に一步城に後ずさりする。

新一はゆっくりと立ち上がり、手に持っていた戦棍を無造作に投げ捨てる。

そして、徒手空拳で女王に歩み寄っていく。

その様子は、まるで猛獣と小動物のような構図である。

だが、気圧されているのは、明らかに猛獣、クイーンアントの方である。

新一は無造作に歩を進める。

胸から流れ出る血をそのままに、何の構えもなく、ただ静かに歩み寄る。

ただ、その全身からは異様なまでの殺気が放たれている。

たまりかねたように、女王は新一に向けて爪を振り下ろす。音をも超えるその一撃は、人ではかわし得ぬ必殺の一撃。

だが、それが振り下ろされた頃、新一は既にその場にいない。すでに女王の懷に飛び込んでいたのだ。

10の・35乗。素粒子と一体化し、歩を進める新一の動きを捉えられるものなどいない。

「ミラージユ・ブレード・ダンス、セツトアップ」

誰にも聞こえぬ呟きと共に実体化した新一は、胸の傷に10本の指を差し入れる。

そこから、指の股に挟まれて現れたのは8本の紅の刃。

まるで、紅榴石でできた両刃の70cm程の剣。

新一は女王に飛び掛り、それをその身体に一度につきたてる。

刃は女王の外骨格を突き破り、身体の内部構造に食い込む。

すかさず、新一は再び量子化し、胸の傷から剣を作り出し、女王に差し込む。

そして、また量子化。そして、また剣を差し込む。そして、また量子化。

800本の剣が女王に差し込まれるまでに要した時間は約0・1秒。

女王はその間、まるで身動きすらしていない。痛みを感じているかどうかも疑問だ。

そして…

「散レッ！」

新一がそう言うと同時に、女王の身体の中の剣が自動的に宙を舞

い、女王の身体を内部から細切れにしていく。

体液を撒き散らしながら微塵に切り刻まれていく女王の巨体。

それは、さながら崩れ行く砂上の楼閣のようであった。

女王の身体は瓦解していき、徐々に小さくなっていき…

やがては、頭部のみが地面に転がった。

「しん…いち…」

何が起こったかまるで認識できないリミアが、呆然と新一の名を呼ぶ。

「…どうやら、俺は思ってたより化け物らしい」

そんなリミアに、苦笑交じりの答えを返しながら新一は歩いていく。

自分が投げ捨てた、愛用の戦棍の元へ。

「…こいつらはきっと、俺と同じなんだよ」

戦棍を拾いながら、新一は言う。

「強くありすぎた。デカくあり過ぎた。…自分で思う以上に自分が化け物だった」

女王の頭部に歩を進めながら、新一は言う。

「普通の人間なら、普通の生き物なら、こんな目に遭わず、普通に過ごせたのかもしれないのにな？」

まだ生きている女王の頭部を見ながら、新一は言う。

この蟻は自分と同じなのかもしれない。
ただ、でか過ぎた。ただ、強すぎた。

その為に、こうして自分に狩られることになった。

普通の蟻であれば、巣を作っても誰も見咎めるものなどいないの
に。

「でも、この町には俺がいる」

そう言って、新一は戦棍を振り上げる。

「その町をよこせなんて…そいつはムシが良すぎるぜ!!」

そして、女王の頭上の冠めがけて振り下ろす。

グシャ!!

戦棍は女王の頭を粉碎し、その息の根を完全に止めた。

これでこの巣は終わりだ。残った蟻達は逃げていくことだろう。
新一達は勝ったのだ。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（11）

「お疲れ様でしたあ、新一さん」

隣の席に座るミーティアが木製のジョッキを掲げ、寄せてくる。

「お前もな」

新一もまたジョッキを寄せ、コツンと打ち合わせる。

そして、二人でジョッキの中のエールを呷る。

ミーティアの魔法でキンキンに冷やされたエールは仕事を終えた直後の胃に染み渡った。

昼時の銀の穂先亭。

町の復旧の手伝いを終えた新一は他の客に混じって、カウンターで今回の勝利をささやかに祝っていた。

隣にはミーティアがいる。彼女が行使した魔法のおかげで、蟻共に荒らされた町はほとんど元の姿を取り戻していた。もう100回近く『修復^{リペア}』の魔法を使っただけにもかかわらず、彼女は涼しい顔である。改めて彼女が途轍もない魔法使いであることが分かる。

そんな彼女にとっても今回の奇跡の勝利は嬉しいものであったらしく、普段飲まない酒を昼間から飲んでいる。

チップは今厨房で料理を作っている。本当は同じ席に座りたいのだろうが、彼が働かないとこの店の料理はまともなものが出てこない。

後で交代しようか、と新一は申し出たが、怪我人は休んでなよ、の一言でいなされてしまった。確かに、穴から帰ってきた直後の新一は血塗れの悲惨な状態だったが。

今は傷はすっかり塞がっている。戦いの後、跡形もなく塞がって

しまったのだ。

「姫はちゃんと送ってくれたんだな？」

「もちろんですう。大分お疲れだったみたいですけどお」

新一の問いに、ミーティアは笑顔で答える。

リミアは終焉の焰での消耗が激しく、穴から上がってきた直後に気を失ってしまった。

ミーティアに抱えられて、館に戻った彼女は、今自室で休んでいるはずだ。

「でもお、本当に倒してしまいましたねえ」

苦笑しながら、ミーティアはジョッキを傾ける。

「魔法に耐性のある変異種であると分かった時点でえ、絶対勝てないと思っていたんですけどねえ」

「俺も死ぬかと思っただぜ」

ミーティアの言葉に、新一も苦笑し、ジョッキを呷る。

実際、蟻の女王は自分の手に余る強敵だった。あの声が聞こえなかったら危なかっただろう。

「でもお、なんなんでしょうねえ、その力はあ」

新一の方を見ながら、ミーティアは不思議そうに言う。

彼は魔法とは縁のない存在だ。その身体は魔法の根源であるマナとの親和性が致命的に悪く、僅かな魔力で動く、簡単な魔法の品物

すらろくに使えない。

故に魔法とは関係ない力のはずだが、それにしても生物の常識を逸脱している。

「要は、俺が化け物なんだろう？」

新一は自嘲的な笑みを浮かべ、ジョッキに残ったエールを一気に呷る。

そう。自分は化け物だ。化け物で人殺しだ。

あの山道で、あの声を聞いた後のことは今も忘れない。

全身の傷から吹き出した血が刃と化し、新一を引きずるバイクと、併走する車に襲い掛かったのだ。

刃はチーマードも、そして車やバイクを分子レベルにまで寸断し、後に残ったのは路上に取り残された新一と要だけだった。

なお、この件で新一は警察から捕まったりしてはいない。事情聴取はされ、犯人に疑われはしたが、証拠不十分であったのだ。何せ、彼らの死体も彼らの命を奪った凶器もどこにも存在しないのだから。

「新一さんは新一さんですよ」

そんな新一の様子を見て、ミーティアは微笑みながらテーブルの上にある小型の樽を手取る。

そして、その中身を彼のジョッキの中に注ぐ。

「そんな事言ったらあ、私も結構な化け物ですよ。歩く最終兵器とか言われる事もありますしい」

ミーティアはそう言いながら、新一の真似をするようにジョッキの中身を一気に呷る。

確かに騎士団の中には、彼女の強大な魔力を揶揄してそう呼ぶ者

もいるらしい。

銃の普及や魔法師団の活躍により、半ば形だけの飾りと化している騎士団の連中らしい言い草ではある。

「…それもそうだな」

そんなミーティアを見て、新一は軽く笑いジョッキの中身を少し飲み、テーブルに乗せられた川魚の串焼きを一口頬張る。

いずれにせよ、こんな化け物が二人もいたおかげで、町は救われた。

今は何も考えず、この世界の故郷を守れた事を祝おう。

幸い、町長から報奨金も出るとの事らしい。財布のことは気にしないことにした。

（でも、貴方は一体何なんでしょうね？新一さん）

新一の横顔を見ながら自身のジョッキにエールを注ぎつつ、ミーティアは心の中で呟く。

そして、ポケットに入っている小瓶に思いを馳せる。

そこに入っているのは、魔法の培養液に漬けられた、魔法で縮小させている新一の左腕。

女王蟻との戦いで切断されたそれを、ミーティアはひそかに同行させていた使い魔に回収させていたのだ。

彼は単なる化け物ではない。ミーティアの知り得るどんな生き物とも性質が異なるのだ。

彼は魔法生物等ではない。もちろん、ゴーレム等でもない。亜人種としても、その力は大きすぎる。

神の化身や悪魔の可能性も考えたが、それにしてもマナへの適性が欠落している点が変だ。

この腕の組織や、彼の血液を調べれば何か分かるかもしれない。

そんなことを考えて、ミーティアは新一に見えぬように自嘲的な笑みをこぼす。

自分は化け物と言われても仕方ないかもしれない。何せ、この世で唯一慕っている殿方である新一を研究材料にしようというのだから。

故郷を守るため、姫を守るため、化け物となって戦う新一の真つ直ぐさがまぶしく感じられた。

「…改めてえ、化け物であることにい、乾杯い」

そう言って、新一のジョッキに一方的にジョッキを打ち付けて、ミーティアは一気に呷り中身を空にする。

「…お前、身体壊すぞ?」

突然のミーティアの行動に、新一は少し驚き、窘めてみる。

「平気ですよ。私はあ、お酒強いんですう」

そんな新一に、ミーティアはくすくすと笑いながら言い、

「新一さんはあ、どうなんですかあ?戦いで強くてもあ、お酒で弱い男の方はちょっと格好悪いですよ?」

そう言って挑発する。

「…上等だ」

新一はそう言って、ジョッキを手取る。勝負に受けて立つ意思

を示したのだ。

杯を重ねながら、少しふわふわする頭の中で新一のことを考える。きっと、彼が自分に会ったのは天命なのだろう、と。

彼の事を研究して、そして、分かった事を彼に伝えよう、と。

そして、彼が例えどんな存在であろうと、こうして酒を酌み交わす仲であろうと。

第2章・そいつは、ムシが良すぎるぜ！！（12）

ガシャン！！

帝都アヴァロンの宮殿の一室。

一人の貴族風の青年が、銀製の杯を壁に投げつけた。

石の壁に跳ね返り、杯は床に落ち、中に入っていた液体は壁にぶちまけられた。

端正な顔立ちに貴族らしい金色の髪。だが、それは長髪を好む貴族らしくなく、短髪に刈り上げられている。

身体に纏うのは濃紺のチュニックであり、その軍人然とした衣装とその下に隠された鍛えられた肉体は彼が非凡な存在であることを表していた。

そんな彼の瞳には野獣のような怒りの炎が宿っている。普段は知性の光が宿るその青い瞳に、だ。

「落ち着きなされ、殿下。元よりただの実験のつもりであったのでしょう」

そんな男に声をかけるものがある。

それは部屋の片隅にいる、全身を黒いローブに覆われた者であった。

殿下と呼ばれた男より若干小柄な、それはフードを深く被っておりその表情をうかがうことはできない。

声はしわがれた老人のようだが、それ故に性別も判断しかねる。

まるで、幽霊のような、そんな印象の男であった。

「落ち着けだと、ガトー！？人がどれだけの対価を、あの忌々し

い竜に払ったと思うんだ!？」

男は苛立ちを隠しもせず、声を荒げる。

「あの忌々しい妹めを消さねば、皇位継承権は危ないんだぞ!？
分かっているのか!？」

「分かっていますとも」

そんな男に、ガトーと呼ばれた男は落ち着いた声で言う。

「しかし、あの蟻共が撃退されるとは少々意外でしたな」

ガトーは少しだけ声の中に賞賛の色を込める。

ミーティアがああ町に休暇で向かうことは事前に察知していたが、女王を撃退できるはずがないことは織り込み済みであった。

蟻共によってリミアを消すことはできなかったかもしれないが、町が滅びればそれを口実に彼女を帝都に呼び戻すことはできただろう。

そうなれば、政治的な後ろ盾のない彼女を消すことは簡単だ。

ミーティアや神竜姫パオラは彼女にとって強力なシンパではあるが、両者とも未だ若く政治的駆け引きは未熟である。たいした相手ではない。

だが、女王はあっけなく撃退され、目的は成功しなかった。

それどころか、この『リミア姫が領民の為に自ら化け物蟻どもに立ち向かい見事勝利した』という報告はすぐに皇帝の耳に届くだろう。

リミアの才能を愛する皇帝のことだ。ますますリミアの才能に惚れ込むことだろう。

実際、プライベートではリミアを後継者にするような話を冗談めかして口にするところがあるらしい。

そして、それが冗談でなくなる可能性があることを、国の重臣は誰もが知っていた。

国に伝わる炎の神剣『イグニス』。その真の力をもし引き出せたとしたら…

「…なんとしても消すんだ、リミアを。我がライザナーザ家がヴァロンを統べるために」

「…御意」

宮廷の一室でそんなやり取りが行われてた事を、今は眠るリミアは知らない。

第一皇后ガートルードの第2子である、自分の義兄ユリウスの企みを知らない。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (1)

頭上に広がるのは、青い大空。

眼下に広がるのは、緑の大地のパノラマ。

人や家畜は豆粒程度にしか見え、民家はタバコの箱より小さく見える。

また、低い山は今自分達の足元にあり、頂上の様子が見渡せる。

「いつ見ても凄いですねえ」

風に髪を梳かされながら、リミアが感極まった様子で言う。

「確かにな」

少し離れた場所で煙草を吸っていた新一も、そう言って同意する。

新一の世界にも、飛行機やヘリのような空を飛ぶ機械はある。

だが、空の上で直に風を感じる事ができる乗り物はほとんどない。

新一達は空の上にいた。

彼らを乗せて飛ぶのは、空を飛ぶ船、飛行艇である。

木製のフリゲート艦程の大きさのそれは、魔法と初歩的な機械工学を組み合わせた魔道技術によって作られたものである。

新一の世界の飛行機ほどの速度は出ないが、それでも旅の足としては最上級のものであり、馬で何日もかかる道程でも、これであればものの数時間で到着できる。

もっとも、隻数はそれほど多くない。故に利用できる者は限られ

ており、庶民が軽々しく利用できるものではないが。

「いかがですか？この黒燕号ブラック・スワローの乗り心地は」

背後から聞こえた声に新一とリミアは振り向いて答える。

声の主はリミアと同年代と思しき少年であつた。

腰まである長い烏の濡れ羽色の髪と整った線の細い顔立ちと、黒いダッフルコートに包まれた華奢な身体と相まって少女のように見える少年は、新一ともリミアとも旧知の仲である。

「ええ。とても素晴らしいと思いますよ、エリオット」

リミアは素直な感想を少年に述べる。

それに対し新一は、

「飛行艇なんざ、どれでも変わらねえだろ」

やや不機嫌そうに新一はぶっきらぼうな答えを返す。

「相変わらずですね、新一さんは」

エリオットと呼ばれた少年は新一に対し、苦笑いして言う。

「昔は親切にしてくれたのに、僕が姫の婚約者って分かってからは冷たいんですから」

「うるせえ」

笑顔で言うエリオットの言葉を、新一は不機嫌そうな声で打ち切る。

「大丈夫ですよ、エリオット」

そんな二人の様子を見て、リミアが可笑しそうに言う。

「この前、エリオットがモンスター討伐隊に従軍したときなんか凄く心配して、加勢しに行こうとするんですから。間に合うはずないのに」

「余計なこと言つなよ、姫」

リミアの言葉に、新一はバツが悪そうに顔を背けて言う。

そして、胸ポケットから紙巻煙草を取り出し、口に咥えてジッポライターで火をつける。

「それはそれは。嬉しい話ですね」

エリオットはそんな新一の横顔に言う。

「でも、僕もウィンディア家の男です。戦いだってこなして見せます」

それに、と言ってエリオットは続ける。

「僕は、世界最強の男新一さんの弟子みたいなものですしね」

「俺は最強の男でもねえし、テメエを弟子にしたつもりもねえよ」

新一は不機嫌そうにそう言い、吸い始めたばかりの煙草を船縁から空へ放り投げる。

確かに、新一はこの少年に投げナイフや簡単な格闘術を教えた。身体が弱く武術に触れた事がなかったというエリオットは、スポンジが水を吸うかのごとくそれらを吸収し、今では魔法とナイフを組み合わせた独自の格闘術を編み出している。

「でも、姉さんは言ってますよ。『新一は世界最強の男で、私を守れるのはあいつしかない』って」

「パオラの奴…」

エリオットの言葉に、新一は苦笑して彼の姉の名を呟く。

このアヴァロン帝国の誇る大陸最強の騎士、神竜姫パオラ・ウィンディア。

一千人の軍を上回り、一万の軍勢と比較されるその力は、その存在だけで他国からの侵略を防ぎ、山賊海賊の跳梁を防いでいるという。

また、数年前に起こったモンスター達の大侵攻の際には、その主力部隊にたった一人で敢然と立ち向かい、見事撃退した。それを機に劣勢を強いられいた人類側は反撃を開始し、見事モンスター達を腐海へ押し戻したのだ。

故に国内のみならず国外からの人気も絶大で、バーン大陸の戦乙女と呼ばれ世界中の人々から英雄視されている。

「もうすぐ姉さんも合流するはずですよ。新一さんに会えるからって、張り切って出て行きましたし」

「張り切って出て行っただ？」

エリオットの言葉に新一は少し首を傾げる。

彼の言葉だと、パオラはエリオットより先に出てたようだ。

それなのに、新一たちと接触したのはエリオットの方が先だ。

そんな新一の心の中の疑問に答えるようにエリオットは言う。

「姉さんは任務に出られたんですよ。最近出沒した湖賊退治に」

そう言つてエリオットは船縁から身を乗り出し、眼下に広がる風景を見る。

そこにはいつの間にか青い湖が広がっていた。

そこはこの世界でも最大規模の湖クリスタル・レイクであつた。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (2)

まるで海のように広い湖の上、2隻の船が浮かんでいる。

ロングシップと呼ばれるそれは、巨大なカヌーのような木製の船であり、主に海賊達が海岸や内陸の集落を襲うために運用される船である。

その上空を飛ぶ、一つの影がある。

翼のある蜥蜴のような姿は、普通には伝承の中でしか見ることのできない竜の幼生であった。

そして、その背に跨るのは長い亜麻色の髪の鎧姿の少女であった。彼女こそはアヴァロンの戦乙女パオラ・ウィンディア。

アヴァロンの平和を乱すものに裁きを与える美しき死神である。

「もう一度言う！投降せよ！さもなくば、船を沈める!!」

船の上空を旋回しながら、パオラは船に呼びかける。

その応答は船から射掛けられる大量の矢であった。

既にマストを切り取られた2隻の船は徹底抗戦の意思を変えていない。

いかに高名な騎士であろうと、単独の相手に負けるはずがない、と考えているのかもしれない。

だが、矢は竜の鱗に弾かれろくなダメージを与えているようには見えない。

「これだから田舎者は!!」

パオラは舌打ちを一つして悪態をつく。

彼らはアヴァロンの威光の届かない辺境からやってきたのだろう。

さもなくば、自分の姿を見ただけで間違はなく投降するはずだからだ。

仕方ない、とにかくにパオラは竜の側面に括り付けている武器を構える。

それは、全長2 m以上もある巨大な鎌。

艶消しの黒で塗られたそれは、まさに命を刈り取る死神の鎌であつた。

パオラはその柄の先端を両手で握り、横一文字に一振りする。すると、その柄が分離し鎖のようになった。

『イシュタム』と銘打たれたそれはパオラの愛用の武器であり、竜から授けられたとされる魔法の品である。

巨大な鎖鎌と化したそれをパオラは空中で振り回し、

「てええええええええええ！！！」

裂帛の気合とともに、ロングシップの船体中央に振り下ろす。

黒い鎌の巨大な刃は更に巨大化し、ギロチンの刃のように船に振り下ろされる。

バキィ！！

けたたましい音とともに、船体は一刀両断される。

胴体が分離した船舶は、切断面から入ってくる水の重みに耐えられず、中央に折り重なるようにして沈み始める。

あまりに常識を逸脱した事態に船員達はしばし茫然としていたが、やがてパニックを起こし我先にと湖に飛び込み始めた。

もう一隻の船も既に射撃を止めている。

見れば、船員達がシャツを木の棒に括り付けて作った白旗を振っている。降参の証だろう。

「最初からそうしていればよかったのに」

はあ、とため息をついてパオラは呟く。

正直、パオラはこの手の賊の討伐は好きではない。

基本的に脆弱で、戦士としての覚悟もない連中と戦っても名誉にならない。むしろ、弱い者虐めをしている気分になる。

アヴァロンの治安を守る騎士としては、やらざるを得ない任務ではあるのだが。

「パオラ様！」

そんなパオラの側面から声をかけてくる者がいる。

全身を白い鎧に覆われた騎士は、鷹のような頭と翼を持つ馬、ピツポグリフに跨っている。

見れば、背後に10騎程のピツポグリフに跨った騎士を率いている。

「遅かったわね、セシル。もう終わっちゃったわよ？」

変形した鎌を元に戻しつつ、パオラは騎士達の先頭に立つ者、セシルに言う。

「流石はパオラ様です。しかし、我らの訓練の相手を残していただかないと困ります」

少々困ったように、だがどこか誇らしげにセシルは言う。

セシルはパオラの副官として、彼女の親衛隊として戦場を共にす

るが、彼女が戦う時には槍も弓も用いたことがない。

何故なら、戦場に到達する頃には既にパオラが全てを片づけているからだ。

それはセシル達パオラ親衛隊に取っては誇りでこそあり、恥ずべきものではない。

我らが神竜姫は究極の騎士であり、その戦場は彼女の舞踏場である。そこには敵などはなく、向かってくる相手は彼女の舞台を彩る花飾りに過ぎないのだ。

「こんな賊程度じゃ訓練にもならないわよ。単なる弱い者虐めにしかないわ」

はあ、とため息を一つついてパオラは言う。

こんな仕事はうんざりだ、と言わんばかりの様子である。

「というわけで、後はよろしく。私は久々に楽しんでくるわ」

鎌を竜の側面に片づけたパオラは、そう言って軽く右手を挙げて言う。

「久々に楽しんで来る…と言いますと？」

いつになく楽しそうな笑顔を見せるパオラに、セシルは鉄仮面の下で、怪訝そうな顔をする

「あいつが来てるのよ。すぐそこに、ね」

そう言ってパオラは頭上を見上げる。

その視線の先には、遙かな蒼穹と雲と、その中に浮かぶ一つの黒い影があった。

それは高高度を飛行する飛行艇だとセシルにもわかった。

「…あの男ですか」

はあ、とセシルと背後にいる騎士たちが一斉にため息をつく。

「恐れながら、パオラ様。あのような得体のしれない男にあまり関わるのは…」

「悪いけど、そこは勝手にさせてもらうわ、セシル」

諫めようとするセシルに、パオラはピシヤリと言う。

「あいつはこの世界でたった一人、私と同じなの。私と正面から戦えるたった一人の人間なのよ」

そう言つて、パオラは竜の手綱を握る。

馬と違い、人語を理解する竜は手綱による操作を必要としないが、それでも習慣として取り付けてるのだ。

「セシル達はそいつらをウインディアまで連行して拘束して。私はエリオットと合流してリミア姫の護衛の任に当たるわ」

「…了解しました」

不承不承命を受けるセシルを尻目に、パオラは竜の手綱を操り、上空へと舞い上がる。

ヒップグリップでは到達できない飛行艇の高度でも、パオラの愛竜シリウスならば余裕で上がる事ができる。

「…困った姫様だ」

困ったようにセシルは言い、背後に控える10人の騎士達を振り返る。

他の騎士たちも一様に頷き、セシルの意見に同意する。

だが、同時にそれも仕方ないと思う心境も同じである。

最強の騎士、神竜姫パオラ・ウィンディアは5半世紀にも満たぬ齡でこのアヴァロンのみならず世界の守護神と詠われる存在となった。

故に戦場が彼女の生活の場であり、年頃の少女としての幸せとは縁がない。

彼女の幸せを願うセシル達にとって、そんな彼女が初めて会った自分と対等に戦える男の存在を、本来は喜ぶべきなのかもしれない。だが、世界中の軍人の憧れであるパオラの心を奪う男の存在は、やはり面白いものではない。

しかも、その男は異世界からやってきたという得体のしれない冒険者である。

今のところ、パオラと例の男の話は公には出ていないが、いずれは醜聞として出回るかもしれない。

パオラはアヴァロン全軍の女神である。下士官の酒席で彼女に関する男の話題などが出れば、血を見るまで収まらない乱闘が発生するするほどだ。

そんな彼女が一介の冒険者に熱を上げているという噂が広がればどうなるか。

だが、そんな心配は無用とばかりに女神は遙か彼方の空へと飛び去っていく。

彼女にとってはそんな俗世の話など無意味なことなのかもしれない。

低空に取り残された騎士たちは、天に舞う竜の姫を見上げそう思

う
の
だ
っ
た。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (3)

「あ、来ましたよ」

船縁から下を覗き込んでいるエリオットが言う。

その言葉を聞き、新一とリミアも船縁に近づき下を見下ろす。

青い湖の風景の中にある一つの黒い影。

それは急速に接近し、やがてその姿が具体的に確認できるようになる。

「こちらは神竜姫パオラ！貴艦への乗船を求める！」

周囲の風が彼女の声を届ける。

それは風の音にも飛行船のプロペラが回る音にもかき消されることなく、新一たちの耳に届く。

「待つてましたよ、姉さん」

その声に落ち着いた様子でエリオットが答える。

その直後に、新一たちの眼前に声の主が姿を現した。

竜を駆る亜麻色の髪の女騎士。

その身を覆うのは、赤い竜の鱗で補強された硬革鎧。オープンヘルムと水晶と革でできたゴーグルがその頭部を覆っている。

彼女は飛行艇に並んで飛行し、相対速度を合わせる。

そして、適当に速度があったところで竜の背中を蹴って、飛行艇の甲板に飛び乗る。

彼女の乗騎であるシリウスは翼まで含めれば20m近い大きさに

なる。

飛行艇としては小ぶりな黒い燕号に着艦するのは困難であるため、こうした方法で飛び移ったのだらう。

飛び移ったパオラは即兜とゴーグルを外し、素顔を露わにする。

少々切れ目の紫水晶のような眼と、怜悧で整った顔立ちは一見冷徹な女武人そのものである。

男装の麗人、という言葉がしっくりくるかもしれない、と新一は思う。

「任務ご苦労様でした、お姉様」

エリオットはそう言って、被った帽子の鰐にまっすぐ伸ばし4指をそろえた先をあてる。

いわゆる、軍隊でよくある敬礼である。

だが、それをつけたパオラは返礼をすることなく、表情を陰しくする。

そして、次の瞬間、

パシン！！

エリオットの頬に平手打ちを見舞った。

「愚か者！軍人でもない者が、敬礼をするな！お前は軍人というもの愚弄するつもりか！？」

頬をおさえるエリオットに、パオラは厳しい声で言う。

確かに、軍人としての理屈としては、パオラの言うことが正しいかもしれない。

だが、姉弟の仲でそういう態度はどうなのか、と新一は思う。

「おい、パオラ」

少し抗議をしようと、新一が口を開こうとしたその時、

「それくらいでよろしい、パオラ」

その言葉を遮るように、リミアがパオラに言う。

その言葉を聞いたパオラはリミアに正対し、その場に跪いて頭を下げ、臣下の礼をとる。

「見苦しい所をお見せいたしました、リミア姫」

「いいえ。パオラが軍人として、騎士として誇りある様を見て、尊敬の念は深まるばかりです」

パオラの言葉にそう答えたりミアは右手を甲を上にしてパオラに差し出す。

パオラはその手を取り、手の甲に軽くキスをして再び臣下の礼をとる。

「私はしばらくエリオットとここで話をします。パオラは新一殿を船室に案内してください」

「かしこまりました」

そう言ってパオラは立ち上がり、そこで初めて新一の方を見る。

「新一殿。姫の護衛の任、大儀でありましたな。後はエリオット

とシリウスに任せて、船室にてゆるりと休まれよ」

「…そうさせてもらうぜ」

そんなパオラを見て、新一は軽くため息をついてそう言う。

リミアと新一は、この女騎士と身分を超えた友情を築いている。少なくとも、新一はそう思っている。

そんな彼女がこんな堅苦しい態度をとるのが少々面白くないのだ。

こんな場所なので仕方ないということもわかつてはいるのだが。周囲には、新一達以外の、黒い燕号を実質的に動かしている船員たちもいるのだから。

「では、こちらに。ウインディアに到着するまでくつろいで欲しい」

そう言っ、パオラは新一の手を取り、甲板にある下り階段へとエスコートしようとする。

この光景を他国の騎士が見れば仰天することだろう。

伯爵位を持つ家の出の騎士、しかも本人も世界各国から名誉騎士の称号を得ているパオラが、一介の冒険者である新一をエスコートしているのだから。

もつとも、これは人を選んでの特別待遇でないことを、新一はよく知っている。

パオラとしては、本来アウトローである冒険者を、アヴァロン帝国に与えられた身分で見下す道理はない、ということであるらしい。エリオットや、パオラの父であるエルリックも新一を下に置かぬ対応をするので、ウインディア家の気質がそうなのかもしれない。

「ああ。わかった」

新一はそう言って、パオラに同行する。

エリオットはまだ少々頼りないが、シリウスは十分頼りになるからだ。

それに、どんな敵がリミアに襲いかかろうとも、自分とパオラが出ていけば撃退できる。

新一は自分が最強だと思っではない。もしかすると、パオラより強い奴もいるかもしれない。

だが、自分たち二人が本気になればどんな奴も敵ではないし、どんなことでも解決できる。

新一はそれぐらい、自分と、それ以上にこの女騎士を信頼していた。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (4)

黒い燕号は軍用のものではなく、ウィンディア家の固有資産である小さな飛行艇である。

故に居住設備はあまり整っておらず、一般の船員が泊まるのは2段ベッドが3つ備え付けられた5畳ほどの部屋だ。

個室になっているのは、船長室と来賓部屋程度しかない。

新一はその来賓部屋へと案内された。

その来賓部屋にはテーブルと椅子、簡素なベッドとクローゼットと本棚と数冊の本がある程度である。

もつとも、ウィンディアにはあと数時間で到着するため、新一がこの船室で宿泊することはないのだが。

先に船室に入った新一は、背負ってたリュックと武器を下した。

壁に立てかけられた新一の武器は、細長い2m程の鋼鉄の六角棒である。

マローダー・アントの女王の鉤爪で、傷ついた戦棍の代わりに持ってきたのだ。

(ま、単なる代用品でもないんだけど、な)

新一は黒く塗装された鉄の棒を見て、心の中で呟く。
そんな新一の後ろから、

「てい！」

唐突にパオラが飛びついてくる。

両腕を胸の前でクロスさせて上半身からぶつかってくるその技は、新一の世界ではフライングクロスチョップという技であった。

「うお!？」

不意を突かれた新一は直撃を食らい、たまらず彼女ごと床に倒れる。

「あはははは！油断大敵ね、新一」

床に倒れる新一の上でころころと笑いながら、パオラは言う。

「普通んなことすると思わねえだろ」

呆れた声で新一は言い、自分の上で笑うパオラに言う。
パオラがじゃれついてくるのは今に始まったことではないが、まさかいきなり食らわされるとは思わなかったのだ。

「いやあ、だつてさ。久し振りだったから嬉しくて、ね？」

パオラはそんなよく分らない理屈を吐いてくる。

この娘は久し振りに知り合いに会うとクロスチョップをくらわすのだろうか？

しかも、久しぶりといつても1カ月ほど前に会っていたはずだが。

「とりあえず掛けてよ？話したいことがたくさんあるの」

まるつきり悪びれた様子もなく、パオラは立ち上がり新一に手を差し伸べる。

「へいへい」

新一はその手を取ってパオラに助けられて立ち上がる。

その手は武芸をやるものに似つかわしくない、柔らかな少女の手であつた。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (5)

「しかし、エリオットの奴騎士じゃなくて軍人になるつもりなのか？」

テーブルを挟んで対面に座るパオラに新一が問いかける。
先ほど見せたエリオットの敬礼は、騎士のそれではなく軍人のものであった。

それは、騎士の家であるウィンディア家の者としてはいささか妙だと新一は思えた。

「うん、まあね」

パオラは少し表情を曇らせて言う。

そして、テーブルの上の、パオラが淹れた（水筒から注いだだけだが）紅茶の入ったカップに口をつけ、中身を少しだけ飲む。

「私が勧めたの。これからは軍人の時代だから」

「そうか…」

そんなパオラの言葉を聞き、新一もまたテーブルの上の茶を飲む。自分でも知らないうちに喉が渴いていたらしく、温いお茶がとても美味しく感じられた。

「弟を沈み行く船には乗せたくないもの、ね…」

パオラは軽いため息をつき、肩を竦めて見せる。

現在この世界で武力に携わる者には2つのタイプがある。

一つは旧来からの騎士、そして、もう一方は近年著しく台頭してきた職業軍人である。

理由は今や戦場は権力者のゲームの場ではなく、人の命がチェスの駒のように消える凄惨な地獄と化してきているのだ。

故に旧来から集団戦をほとんどやらない騎士は戦場においてほとんど役に立たない。

更に、職業軍人と同じく台頭してきた黒色火薬銃により、騎士の象徴であるスーツアーマーは無用の長物となり、ランス等による突撃戦術は役に立たなくなってきた。

今や戦場での主力は職業軍人であり、騎士は位だけのお荷物になりかかっている。

もちろん、パオラのような優秀な者も存在する。だが、そんな者は極僅かであり、しかもその素養が子々孫々受け継がれるとは限らないのだ。

このような現状では、パオラが軍人の道を勧めるのも無理なからぬ話だ。

「しかし、急な話だな。姫を帝都に戻すなんて」

少し暗くなつた雰囲気を変えようと、新一が話題を変える。純粋にそのことが気にかかっていたからということもあるが。

今回の件は本当に急であつた。

突然、黒い燕号がリミアの館の裏庭に降りて来たかと思うと、突然エリオットが『皇帝陛下の命により、姫を帝都にお連れすることになりました』と言い出したのだ。

事前の通達や書簡などは何もない。だが、使者がエリオットである以上リミアを亡き者にする陰謀であるとは思えない。

故に、リミアは新一を警護に連れ帝都へと向かっているわけであるが…

「姫、あの物凄い縦ロール髪のパバアから狙われてるんだろ？大丈夫なのか？」

皇后ガートルードの実家であるライザナーザ家は、アヴァロン建国にも貢献した古くから続く名家である。

彼女はその権勢を守るため、様々な手を打っている。リミアを抹殺しようとするのもそのためだ。

「パバアじゃなくて皇后陛下、ね」

新一の不敬罪に値する言葉に、パオラが顔をしかめて訂正する。パオラ自身は皇后にいい感情を持っていないはずだが、騎士としての体面上そう言わねばならないのだろう。

「大丈夫よ。その為に私やエリオットが同行するのだし。いくら皇后陛下もウィンディア家に喧嘩を売るような真似はしないわ」

パオラは胸を張って誇らしげに言う。

ウィンディア家もまた建国に貢献したと言われる古くからの名家である。そして今もアヴァロンの騎士のトップにして、軍の元帥を兼任するエルリックや国家の守護神パオラを擁しておりその勢いはますます盛んである。

それを敵に回す程皇后は愚かではない。潰し合うには危険きわまりない相手であり、万一潰せばアヴァロンの防衛力は著しく低下するのだから。

「しかし、姫さん消して何の得があるんだろうな？」

新一は疑問に首をひねる。

リミアは皇位継承権は15位以下であり、それだけでも皇位継承は絶望的である。

まして、彼女の母は既に死亡しており、さらに実家もすでに没落しており大した力はない。

本人の実力そのものは大したものだが、いろいろな意味で政治的に無害なリミアを無理やり消そうとする理由が、新一にはイマイチ分らない。

「本当にねえ」

そんな新一と同じように、パオラも首をひねる。

軍の仕事で忙しい彼女は国の中央の事情には疎い上、政治的知識も乏しい。

故にリミアを消そうとする皇后の意思が分からない。

「ま、エリオットと結婚すれば、リミア姫には晴れてウィンディア家という後ろ盾がつくのだし。そうなれば、いちいち陰謀に怯えたりしなくて済むわ」

「あー、そうかいそうかい」

笑顔で言うパオラに、新一は実にうんざりした顔で言う。

「そんなに面白くないの？エリオットと姫が婚約者なのが」

ため息を一つ吐いて、パオラが言う。

リミアとエリオットの婚約は皇帝自らが申し出た事であると言
う。

政治的な意義で考えると、一石二鳥な結婚ではある。ランズロ
ット家とウィンディア家の繋がりには緊密になり、リミアには強い後

る盾がつく。

新一はミーティアからそれを聞いており、悪い話ではないことは知っていた。

だが、気分的にあまり面白くはない。

不機嫌そうに顔を逸らし、カップのお茶を飲む新一をしばらく見つめて、パオラは不意に悪戯っぽい笑顔を作る。

「もしかして、あんた姫の事好きなの？」

その言葉を聞いた瞬間、新一はぶー、と勢いよくお茶を吹き出す。

「汚いわね。掃除する身になってみなさいよ」

「いきなり変な事を言うからだろう!？」

呆れたように言うパオラに、新一は口元を拭いながら言う。

「別にいいじゃない。姫は可愛いんだし。私が男だったら、エリオットには渡さないわよ？」

テーブルに頬杖をつきながら、パオラは言う。
その目は楽しそうに新一の答えを待っている。

「…どっちかって言うと、ミーティアの方が好みだな」

「あら。ミーティアが聞いたら喜ぶわよ、それ」

実に面白くなさそうな表情で、パオラから顔を逸らしたまま言う

新一に、パオラはからかう様に言う。

パオラとミーティアは親友同士であり、かけがえのない相棒同士である。

パオラが大きな戦に出陣するときは、軍師としてミーティアが行き彼女に策を授けるのだ。

「あいつはいい女だからな。普通の話だろ？」

別に言っていることに偽りはない。リミアは妹のような存在であり、恋愛対象とするには少々若すぎる。その点、歳が似通っていてかつ学識と落着きのあるミーティアの方が恋愛対象としては相応しいと思うのだ。

「新一、騎士になりなさいよ。私が陛下に推挙してあげるから」

パオラはそう言って、カップに残った茶を飲み干し、続ける。

「あんたと私なら騎士の歴史の有終の美を飾れると思うの。二人で歴代最強の騎士の名を青史に残しましょう？」

「買いかぶられたもんだな」

パオラの言葉に応えながら、新一は胸ポケットから煙草を取り出し、シガレットホルダーに接続して火を付ける。

「…俺は騎士になんてならねえよ」

そう言って、新一は煙草を肺一杯に吸い込み煙を噴出す。

「なんで？私が推挙すればすぐにでも騎士になれるわよ？」

パオラは軽く首を傾げながら新一に言う。

国家の防衛の中枢であり、アヴァロンの未来を背負う彼女の発言力は絶大であり、その言は皇帝としても無視できない。

まして、新一ほどの武勇があれば自然に騎士の位を授けられても不思議ではない。このモンスターが跳梁跋扈し、戦火が絶えたわけではないこの世界で、功績などいくらでも立てられる。

「騎士になれば、姫やミーティア、それに私とだって結婚できるわよ？」

皇族であるリミア、貴族であるパオラやミーティアと結婚するには、貴族としての位が必要である。騎士のくらいはれっきとした貴族の位であり、それを得れば確かに彼女達と結婚できる条件は整う。

「いらねえよ。俺は元の世界に戻るんだ」

パオラの言葉に、新一は背けた顔の前でパタパタと右手を縦に振って応える。

確かに、ミーティアやパオラのような美女と結婚できるなら、それはそれで幸せなことかもしれない。

だが、新一は帰るのだ。妹の待つ元の世界へと。

「あんた、まだそんなこと言ってるの？」

その言葉を聞き、パオラは呆れたように言う。

「ミーティアやランドルフ様ですら帰る糸口もつかめないのに、どうにかできると思ってるの？」

はあ、とため息をつきながらパオラは言う。

元の世界へ帰りがついている新一のために、パオラも手がかりを探していた時期もある。

だが、誰に尋ねても異世界の話など知らないと言う。

魔術や超常現象に関してはアヴァロンでもトップクラスの知識を持つミーティアや、宮廷魔術師長ランドルフでさえも、異世界へ行く手段などは聞いたことがないという。

「それに元の世界へ帰っても、ゴロツキどもの片棒を担ぐだけの生活なんでしょ？ そんな生活になんの末練があるの？」

パオラの言葉を聞き、新一は言葉を詰まらせる。

元の世界にいた頃、新一は度重なる暴力事件に巻き込まれたせいで進学先やまともな就職口を失い、ヤクザの片棒を担ぐ形で用心棒や借金の取立てなどをやっていた。

安い賃金で社会に闇に生きる連中のために暴力を売り物にして生きていかねばならない日々。

それは新一にとっては針の筵で座っているような日々であった。

「それよりはさ、この世界で栄光に包まれて生きたいと思わない！？ この世界でなら、貴方は英雄になれるのよ！ 貴方を見捨てた世界に何の末練があるのよ！？」

パオラは身を乗り出して、新一に言う。

パオラとしては自分と対等に戦える力を持つこの青年が認められない世界そのものがかかしいと思う。

パオラは新一の友として、彼の世界の話を経度和なく聞いた。そして、そこで彼が味わった辛酸の数々も。

「…俺は」

新一は言葉に詰まりながらパオラの方を見る。

その目は、友の行く末を案ずる者のものであり、同時に新一に側にいて欲しいと願う少女のものであった。

「…よく考えてよね？どっちがいいか」

そう言つて、パオラは新一から視線を逸らし、席を立ち部屋から出て行く。

そろそろウィンディアだ。湖賊退治を終えた自分の無事な姿を領民に見せなければならぬ。それがこの国の騎士であるパオラの勤めなのだ。

「俺は…」

新一はテーブルの上に肘を置き、項垂れたまま呟く。
パオラの言うことはもつともだ。

元の世界へ帰れる方法は皆目見当もつかず、帰ったところで待っているのはあの苦痛に満ちた日陰者としての生だ。

正直、要も本当に待っていてくれるのかも分からない。

だが、こちらの世界では少なくともリミアやミーティアやパオラは自分を必要としてくれる。

それならば、こちらの世界にいる方がいいのではないか。ありのままの自分を受け入れてくれる人のいる世界の方がいいのではないのか。

新一には答えが出せない。元の世界に帰って日陰者として生きるのか、この世界にとどまって戦いの中に身を置くのがいいのか。

「俺は…普通に生きたいだけだ…」

新一は呻くように言う。

だが、それを聞く者はいない。いなくていい。

自分にあるのは戦士としての資質のみ。少なくとも、パオラはそれを愛して自分を慕ってくれる。

だが、自分が戦いを拒否した時、彼女らは自分をどう思うのだろうか？

いくら悩んでも答えは出ず、新一はただ机の上で懊悩するばかりであった。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (6)

アヴァロン帝国東方に位置するウィンディア騎士団領の領都ウィンディアは山とクリスタルレイクに囲まれた天然の要害であり、合戦時の主要拠点としての性格が強く現れた都市である。

地理としては辺鄙な場所にあるが、海洋都市並みの港を備えたこの都市は、クリスタルレイクを交通に利用するため、商業など人の交流は盛んである。

山から吹き落とす風を利用した風車が多数あり、それらを動力として様々なことをしている。

例えば…

「わ」

パオラは目の前に漂ってきたシャボン玉を見て微かに驚きの声を上げる。

これは半年ほど前から設けられた洗濯機によって生み出されたシャボン玉。

「しっかり動いているみたいね」

パオラは竜の背中から下界を見下ろして満足そうに呟く。

湖の淵に設けられた風車小屋と、円形のハンドルのついた樽のようなものは洗濯小屋である。

それは新一から洗濯機の話聞いたミーティアが開発したものであり、現在は試験的にこの風車小屋ひとつで運用している。

風力でハンドルを回すだけで洗濯ができるらしいが、しっこい汚れは落ちない、という事をメイド達から聞いたことがある。

だが、十分機能はしているらしく、将来的には施設を増やす予定

である。

ふと、地上にいる人々が空を見上げる。地面に投げかけられた影がその存在を気づかせたのだ。

「パオラ様!!」

人々は口々にそう言い、その場に跪く。

「いちいち跪かなくともよい。元の作業に戻るがいい」

空から民の様子を見たパオラは、低空に下りてきて言う。

貴族の前では平民は平伏し、礼をせねばならないのはほぼ世界共通の礼法である。だが、ウィンディアではそれらは免除されている。貴族が通るたび、いちいち平伏させているのは民の生活に無意味な不便を強いるだけだからだ。

だが、民はパオラには自ら進んで平伏する。

このウィンディアの民にとってパオラは自分たちの誇りであり、神から遣わされた天使なのだ。

「…相変わらず、慕われてるな」

パオラの後ろにタンデムして乗る新一は、その様子を見て軽く笑って言う。

以前からパオラが民に慕われていることはよく知っている。美しく強く気さくで、民の生活の向上を第一に考える彼女が民から慕われるのは無理なからぬ話であった。

「まあね」

少し照れくさそうに新一の言葉に応えたパオラは、再び上空へと舞い上がる。

黒い燕号は先行してウィンディア城に向かわせている。

パオラは民の様子を見るため、城下町の上空を飛んでいるのだ。

領主の娘であり、このウィンディアの象徴でもある彼女は、常に町の様子を把握し、民に自分が健在であることを見せておかねばならないと考えているのだ。

「…パオラは凄いな」

新一は独り言のように、呟くように言う

その言葉の中には羨望の念が込められていた。

パオラは新一と同じく、人知を凌駕する膂力を持つ化け物である。だが、人々からただ疎まれるだけだった自分に対し、パオラはまるで天使のごとく敬われている。

住んでいる世界が違っただけで、これほどまでに差が出るのか。それとも、パオラが美しい女性であることが大きいのか。

もし、自分がこれだけ人々から慕われていれば、自分の人生はどうなっただろうか。両親は離婚せず、妹ともに平穏な人生を過ごせたのではないのだろうか。

「ありがとう。でも、新一も同じになれるんだよ？」

新一の言葉の中の意図を理解したパオラはそう言う。

「この世界では新一は英雄になれるの。だから、一緒にいようよ？」

パオラの言葉を聞き、新一は黙り込む。

「ま、話は後でゆつくりしようか」

そう言ったパオラは木製の壁に囲まれた建物へとシリウスの首を向ける。

それは三角屋根で瓦葺きの、まるで新一の世界の建物のような木造の建築物。

3階建てのそれは、この世界の一般的な城と違い横の面積が広い。それは、この地方を統括する領主の住居であるウインディア城。居住性に配慮した結果、イズモの建築技術を取り入れて作った建物であり、この世界の城としては異質なものである。

シリウスはその上空を飛行し、外庭の一角に下りる。

学校のグラウンドのようなそこは、練兵場。

「その前に、これに付き合ってよね？」

そう言って、パオラはシリウスの側面に下げられている巨大な鎌を取り外し、掲げてみせる。

また始まったか。新一はそう理解し、少しだけうんざりした顔になった。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (7)

「さっさと終わらせるぞ?」

練兵場の一角で新一は対峙するパオラに言う。

その右手に持つのは、2 m程の鋼鉄製の六角棒。

それを垂直に立てるようにして持って立っている新一はあまり面白そうな顔ではない。

周りで見ている訓練中であつたと思しき兵士達の視線が気になるのだ。

彼らは訓練の手を止め、パオラとその相手の自分を見物するために集まってきたのだ。

新一は戦うのは好きではない。そして、戦っている自分を見物されるのはもつと好きではない。

パオラもそのことを知っているはずだ。なのに彼女は兵士たちを追っ払ったりすることはない。

「おや、今日はいつもと得物が違うようですね?」

シリウスから降り立ち、漆黒の鎌を構えるパオラは軽く首を傾げて言う。

兵達が見ているため、その口調は堅い。それが新一にはますます気に入らない。兵士たちがいなければいつものように話せるのに。その方がお互い楽だろうに。

パオラが一体何を考えているのか、新一には分からない。

「ちよつとイカレちまつてな。修理中なんだよ」

新一は数日前の蟻の女王との戦いを思い出す。

女王の鋭い爪の一撃を受けた愛用の戦棍は柄の半ば近くにまで傷が入っている。

あのまま使い続けていると柄が折れてしまう可能性があったため、代わりの武器としてこの六角棒を借り受けたのだ。

「それに、お前を相手にするのなら、こいつの方が都合がいい」

新一はそう言って不敵に笑う。

パオラは武芸の技も相当なもので、かつ腕力も新一と大差がない。力任せでどうにかなる相手ではない。故に小回りの利く棒杖の方がいいのだ。

「ほう、それは楽しみでありますな」

そう言ってパオラは笑う。それは獲物を見つけた猛禽のような凄味があった。

「では、参ります」

パオラは軽く一礼をして、左手に大鎌、右手に鎌の柄から延びる、拳ほどの大きさの分銅のついた鎖を持つ。

次の瞬間、パオラの右手が閃いた。

投げられた分銅が亜音速で新一の顔面めがけて直進してくる。その一撃は、以前に受けたオーガの一撃すら遥かに凌ぐ重さがある。普通の人間がこれをともに受ければ、たとえ板金鎧で身を固めていたとしても生存はおぼつかない。

だが、新一は首を軽く横に動かしただけでそれをかわした。常人では感知することすら不可能なその一撃を、新一の眼は完全に捉えていた。

パオラは左手の鎌を手前に引き、鎖を引き寄せようとする。鎖は空中で縦に弧を描きパオラの頭から降るようにして戻っていく。

新一はすかさずそこに踏み込もうとする。

リーチは完全にパオラの方が有利だ。懐に入らなければ勝ち目はない。

だが、パオラの大鎌がそれを許さない。

片手で振られた2m近い大鎌は、踏み込もうとする新一の脛を正確に狙う。

だが、それは新一の想定内だ。

新一は迫る刃をジャンプしてかわし、両手で杖の後端を持ち身体を後ろに逸らしながら渾身の力をもって振り下ろす。

パオラは鎌の刃の重さに身を委ね、重心を移すことで身を右側に移しその一撃をかわす。

ガッツ！

鋼鉄の杖が地面に叩きつけられ、鈍い音が鳴り土が僅かに穿たれる。

仮に足場が石畳であつたなら、ひびでも入っていたかもしれない。

やがて、新一の頭上の鎖が軌道を変えながらパオラの方へ戻ろうとする。

パオラは鎌を右手に持ち替え、操作して空中で鎖の輪を作り、それに新一の首がはまるようにする。

そして、首がはまるのと同時に新一の後方に移動し、鎖の分銅を左手に取り新一の首を絞めようとする。

だが、

ガキン！

鎖は新一の振り上げた杖によって弾かれる。

「2度も同じ手が通じるか！」

新一は一度鎖による絞め技で負けたことがある。一度受けた技でもう一度負けるなど格好悪い。そんな真似はさすがにできない。

新一は身をかがめ、後ろに振り向く勢いで足を伸ばし、足払いをかける。

「くっ！」

足払いは見事パオラの足元を掬った。彼女は地に転倒し、仰向けになる。

新一はすかさず棒杖を手放し、パオラの上に馬乗りになる。そして、彼女の首に両前腕部を乗せ体重をかける。いわゆるギロチンチョークだ。

本来、素手格闘にも十分な技量を持つパオラに決まる技ではないが、不意を突いたおかげもあって決めることができた。

純粋な腕力は新一の方が僅かに上で、寝技の腕も新一の方が上だ。後は抵抗を封じて絞め落とせば勝ちだ。

新一がそう判断し、更に体重を乗せようとした次の瞬間、

「うわっ！」

唐突に新一の身体が弾き飛ばされた。

それはパオラの力ではなく、唐突に巻き起こった風の力であった。

「…竜魔術か!？」

後方に3m弾き飛ばされた新一が、首だけを起こしてパオラの方を見る。その傍らには、本来見えるはずのない空気の身体を持つ竜が見えた気がした。

その機を逃さず、パオラは鎌を手に新一に駆け寄る。新一も何とかはね起き、状況を挽回しようとする。

だが、膝立ちになった新一の首には黒い鎌の刃が突きつけられていた。

「…勝負あり、ですね」

「…だな」

パオラが静かにそう言い、新一が深く息を1つ吐いて応える。

その次の瞬間に、喝采の声が起こる。

我らが女神の勝利を讃える配下の兵達の声だ。

「流石は新一殿。竜魔がなければ勝てませんでしたね」

「…かもな」

微笑むパオラの差し出す手を取り、新一は仏頂面のまま立ち上がる。

そして、そんな自分を省みて少しおかしくなり口の端で笑う。

戦いは嫌いなくせに、負けると何となく悔しい。おかしい話だと思ふ。

「…さて、では共に食事に参りましょう。リミア姫も待っておりますでしょう」

そんな新一の様子を何となく察したパオラは、そこで勝負の話を打ち切り食事の話をする。

そろそろ昼時。新一も腹を空かせているだろう。食事で機嫌が直ればよいのだが。

（ごめんね、新一）

パオラは心の中で新一に謝る。

正直、パオラは新一とは武芸だけで勝負するつもりだったし、今までもそうしてきた。

だが、今回は配下の兵士達の見ている前である。万に一つも負けられない。故に竜魔術を使ったのだ。

そう。パオラは何者にも負けられない。自身の敗北がアヴァロンの防衛に少なからぬ影響を与えることを知っているのだ。

いつか新一が正式な騎士となり、自分とともにアヴァロンの盾となる日まで、パオラは無敗の女神でなくてはならないのだ。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (8)

「ほんと、ごめん!」

ウィンディア城にあるダイニング。

木製の床に赤いカーペットが敷かれ、壁には白い壁紙が張られている。暖炉や多数の燭台もあり、ここだけを見るなら、石造りの城と大差がない様相である。

質実剛健を旨とするウィンディア城の中では調度品が多く、応接室の次に華美な部屋である。

その中央に据えられた長方形のテーブルの隣の席に座るパオラが両手を顔の前で合わせて謝ってくる。

先ほどの勝負で竜魔を使ったことだろう。

「いいって。竜魔も含めてパオラの全力なんだ。今まで使わなかったことが不思議だったぐらいだ」

そんなパオラに新一は苦笑して言う。

別にパオラとの戦いは武芸だけで行うという取り決めなどはなかった。恐らく、魔法などを使えない新一に遠慮してパオラが使っていないかったのだろう。

「でも、姉さんに竜魔術を使わせるなんて、流石新一さんですね」

手前の席に座るエリオットが心底感心したように言う。

竜魔術とは魔法の亜種であり、竜魔と呼ばれる精霊を駆使して様々な奇跡を起こす術である。

パオラにとっては切り札といえる代物であり、一騎打ちで彼女にこれを使わせられる人間は世界に5人といないだろう。

「うれしくねえな」

そんなエリオットに新一は仏頂面で言う。

戦いが好きなわけではないが、どうせ戦うなら勝ちたい。

武芸で勝てても、切り札を使われると負けるようではどうしようもない。むしろ、手加減されているみたいで腹が立つ。

「なんか、魔法みたいな切り札が欲しいな」

「魔法はそんな便利な代物ではないですよ」

頭の上で両手を組んで言う新一に斜め前に座るリミアが言う。

「ほとんどのものが詠唱や照準などの手間がかかるので、近接戦で咄嗟に使える魔法は自衛用のものだけです」

自身も優秀な魔術師であるリミアが言う。

魔法は呪文の詠唱と踊るような動作を必要とする。その間できる行動が限られる。

また、照準を行わなければコントロールすることは困難である上、下手に放つと自分や味方を巻き添えにする。

中には火炎壁陣のような極端に呪文の詠唱が短く、照準もほとんど必要のない魔法もあるが、新一ほどの武力があるなら基本的に必要がない代物だ。

「それに、新一は魔法使えないですし」

「そうなんだよなあ」

苦笑して言うリミアに、新一は軽いため息をつく。

新一は魔法の根源であるマナとの親和性が極端に低い。故に魔法等の超常のテクノロジーに触れることができない。

呪文の詠唱はおるか、一般の人間なら誰でも触れる魔法の品物すら扱えない。

そのため、新一は自身の武術だけが頼りなのだ。

（あの力が常時使えればなあ）

新一は数日前の蟻の女王との戦いを思い出す。

あの女王は相当な強敵だった。目の前にいる女騎士でさえ勝てるかどうかかわからない。

だが、自分はそれを圧倒してのけた。

まるで時が止まっているかのように動かない巨大蟻に、赤い刃を数百本も打ち込んでく

自分。

魔法をも遥かに越える奇跡。その力はもはや人のものではなく、神に等しいとすら言えるかもしれない。

あの力さえあれば、どんな敵にも負けることはないだろう。

「まあまあ。新一さんは十分強いんだからいいじゃないですか」

気落ちした新一を慰めるようにエリオットは言う。

「まあ、そうだな」

そう言って新一の考えを晒す。

自分は何を考えていたのだろう。

自分は戦いたいわけではない。普通に生きたいだけだ。

普通に生きるのには過分な力が既にあるのに、それ以上の力がな

ぜ必要なのか。

ましてや、神に匹敵する力など持ってどうしようというのか。

「それにしても遅いわね。暖め直すただだし、時間がかかるとは思えないんだけど」

パオラがそう言って首を傾げる。

この部屋に集まっているのは、食事を摂るためである。久し振りにリミアや新一とテーブルを囲める事をパオラはとても楽しみにしていた。

「せっかく腕によりをかけて作ったのに」

「…食べるもん出てくんのか、それ？」

呟く様に言うパオラに新一が言う。

「あー！酷い！！私、そんな料理とかできないように見える！？」

「まあな」

唇を尖らせて言うパオラに、新一は表情を変えずに言う。

パオラに限らないのだが、この世界の王侯貴族は料理などの家事に関わることはないらしい。

リミアも料理などの経験はなく、包丁を握ったことすらないらしい。

どちらかといえば女の子らしいリミアですらその調子なのだから、武人であるパオラが料理などできるとは思えないのだ。

「まあいいわ。今から出てくる料理を見たら、あんたきつと腰を

抜かすわよ」

「悪い意味で、でなけりやいいけどな」

指を目の前に突きつけて言うパオラに、新一は軽く挑発的に笑って言う。そこまで言うなら是非貴族のお嬢さんの作った料理を食べてみたいものだ。

次の瞬間、応接室の扉が開く。

だが入ってきたのは料理を持ったメイド達ではなく、軽装の鎧を身に纏う二人の騎士であった。

「あれ？セシルにロディ、どうしたの？」

その姿を認めたパオラが言う。

この若き親衛隊の双子の兄妹は、騎士の修練学校とも言える銀竜館で修行していた頃からの付き合いである。いわゆる同門の後輩であり、私的な友人でもある。

二人とも赤毛のボブカットであり、よく似た中性的な顔立ちをしている。さすがに声には差があるため、喋れば差がわかるものの、そうでなければ新一には区別がつかない。

二人の騎士はテーブルの傍まで歩み寄り、跪く。その途中に新一は面白くなさそうな視線が投げかけられた気がしたが気にしないことにした。この二人が新一の事を快く思っていないのは前から知っているし、その理由も納得できるからだ。誰だって敬愛する主人が得体の知れない冒険者と懇ろになっっているのは面白くないだろう。

「リミア姫、パオラ様。お邪魔して申し訳ありません。緊急事態が起きました」

「緊急事態？」

ロディの言葉に、パオラが眉を顰める。

このウィンディア騎士団領で起こる大抵の問題はパオラが出るほ
どでもないことが多い。そんな場合は、ロディやセシル辺りが解決
して、パオラには事後報告がいく程度である。いつもいつもパオラ
が出張つていては、他の者が剣を振る機会もなく、実戦経験に繋が
らないからだ。

今日の湖賊の件は本来セシル達に任せてもよかった程度の事件で
あり、パオラの下に直接報告が来たわけではない。ただ、パオラが
少し我が侬を言っただけだ。

つまり、今度の話は湖賊などよりもっと大きな脅威が迫っている
ということだ。それこそ、パオラが出なければどうにもならないほ
どの。

「はっ！実は…」

セシルは跪いたまま報告する。

その内容は今まで聞いたこともないような異常事態であった。

「オークどもが腐海より進軍を開始しました。その数、およそ1
000…」

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (9)

「俺も行くのか？」

パオラの部屋の窓の外にある広いバルコニーで新一が、目の前に立っている鎧姿のパオラに言う。

彼女はこれからすぐに出陣する。オークどもの軍は自身と親衛隊だけで粉碎し、残りの兵は万一に備え各都市の防衛に当たらせるとのことである。

世界最強の騎士であるパオラにとって、オークが1000体いたところで相手にもなりはしない。叩き潰すまでにかかる時間は半時間もしないだろう。

だが、それ以外の相手が紛れてると危険もあるかもしれない。腐海に住むモンスターはオークだけではない。邪悪な竜なども潜んでいるという話もある。それらが相手ではさしものパオラも分が悪いかもしれない。自分もついて行く方が安全であろう。新一はそう考えた。

「いいわ。あんたには他に重要な仕事があるでしょ？」

そんな新一にパオラは軽く笑って言う。

「私がいけない以上、姫の護衛はあんたとエリオットが頼みなんだから。しっかりやってよね？」

「軍から護衛用の飛行船が来るんじゃないのか？」

新一はパオラの台詞に首を傾げる。

そもそも黒い燕号で直接帝都に行かず、ウィンディアに来たのは

帝都から迎えの大型飛行船が来るとのことだからだ。

やってくるのは飛行船団長のギルバートと言う男である。

近年頭角を現してきた軍人であり、パオラの古い友人であるという。

「それなだけどねえ……」

パオラは大きさにため息をつき、肩を竦めて言う。

「モンスターの警戒監視任務が急遽入ったから、飛行船は回せないって、ついさっきギルから連絡が入ったのよね」

「なんだそりゃ……」

新一は呆れた表情で言う。ここまで引っぱりまわして、結局迎えをよこさないとはどういうことなのか。

「仕方ないでしょ？オークが1000体規模で動き出すなんて異常事態を目の当たりにしたら、警戒監視だって必要だと思うわ」

新一と対照的にパオラはサバサバとした口調で言う。

腐海でオークたちがそれだけの数動き始めたということは、他のモンスターの巢にも何か動きがあるかもしれない。それを監視し、迎撃することは軍としては最優先任務であるからだ。

「しばらくしたら黒い燕号の準備もできるから、それで帝都に向かって頂戴。私も片付き次第、帝都に向かうから」

そう言って、パオラは右手の親指と人差し指で輪を作り、それを口に当て口笛を吹く。

すると、空から大きな影が投げかけられ、やがてそれが急速に大きくなってくる。

上を見上げると、パオラの愛竜である白い鱗の飛竜シリウスが降りて来ていた。

やがて、バルコニーに降り立ったシリウスが差し出してくる頭を軽く撫でたパオラは、直ぐにその背に飛び乗る。

「んじゃ、行ってくるわ。姫をよろしくね？」

「ああ」

パオラの言葉に新一が頷くと同時に、シリウスは翼をはためかせ空中に舞い上がる。

そして、数秒後には天高くにまで到達し、彼方へと飛び去っていく。

その途中で合流した複数の影は先行していた親衛隊の者たちだろ
う。

「…かなわないな、あいつには」

新一は飛び去ったパオラの姿を目で追い続けながら呟くように言う。

パオラは自分と同じくらい化け物だ。だが彼女はそれを受け入れ、気に病むことはない。むしろ、その力を誇りにさえしている。

もちろん、環境のせいでもあるのだろうが、彼女と同じ境遇なら自分はああ成れたのだろうか。

いつかは自分もあなれるのだろうか？

知らぬ間に口に咥えていた煙草に火を付けて、煙を吐き出しながら新一はそんなことを考えていた。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (10)

日が傾く。

飛行艇の甲板から見える下界の風景は昼間とさほど変わらない。だが、橙色の夕日に染められたそれは昼間見たものと大きく印象を変えていた。

リミアはそれを甲板の縁付近に立って、飽きもせず眺めていた。よほど空の風景が好きなのだろう、そう思っただけで新一は微笑んでリミアの横顔を眺めていた。

「?どうしました、新一?」

新一の視線に気づいたリミアが振り向き、不思議そうに尋ねる。

「いや、姫は余程空の風景が好きなんだなあ、って思っただけ、な」

新一は軽く笑いながら言う。

そう言いながら自身は、初めて飛行機に乗ったことを思い出す。あの時は自分が空を飛んでいるのが信じられなくて、寝てしまった母親の隣の席ですと窓の外を眺めていたものだった。

「ええ。空からの景色は好きです」

そんな新一の問いに、リミアは素直に答える。

「でも、今思いを馳せているのは、あの日のことです」

「あの日?」

リミアの言葉に、今度は新一が首を傾げる。

「新一と初めて会った日のことですよ」

リミアはそう言って、再び船縁に身を預け夕日の中の下界の風景に目を移した。

「ああ。あの日のことか」

新一もまた、船縁に身を預け下界の風景を見つつ言う。
確かにあの日もこんな夕焼け空の中であった。

「覚えています？」

「忘れるわけないだろう」

悪戯っぽく笑うリミアに、新一は苦笑して答える。
そう。あの日に始まったのだ。新一のこの世界での生活が。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (11)

近郊の山にある小高い丘の上。

自身の暮らす町が一望できるこの場所がリミアのお気に入りであった。

特に夕暮れの橙色に染められた町を見るのが大好きであった。

町の近郊とはいえ、稀にモンスターが出没することもある。そのため、屋敷の者からは一人で来るとあまりいい顔はされない。

だが、正直リミアは自らの武芸の腕に自身がある。実際武芸だけでも屋敷の護衛の誰にも負けない。

リミアは帯に差し込んである扇を手取る。

先端に刃がついた銀製の扇は、基本的に剣を携行しない女性であるリミアの愛用の武器であり母の形見である。母であるエルマイア妃もこの扇を用いた護身術を習得していた。

「今日もいい天気でしたね」

風に髪を梳かれながら、リミアは自らの住む町を見下ろす。

帝都からこの町に引越して来てはや一年。リミアは幸せな日々を過ごしていた。帝都とは比べるべくもない田舎ではあるが、ここでは伸び伸びと暮らせる。

帝都では宮殿の一角に押し込められて、来る日も来る日も愚にもつかない礼法の習い事ばかりの日々であった。

しかも、大概の場合食事には毒が入っており、ほとんどろくに食事もできなかった。

年の離れた兄や姉達からは命に関わるような暴行を受けたこともあり、更に暗殺者とおぼしき者から襲撃された事も一度や二度では

ない。

彼女の惨状を耳にした宮廷魔導師長ランドルフの計らいにより、リミアはこの町に移り住めたのだ。

リミアは大きく背伸びをし、胸一杯に空気を吸い込む。ここでは暗殺者の影に怯える事もない。食事も安心してとることができる。

また、召使いや護衛の兵こそ少ないが、その分自由があり、リミアはかなり好き放題に館をでて町を歩き回っている。

町の人々も一応身分の高い者だとは認識しているが、どこかの貴族のお嬢様程度にしか認識しておらず割と気兼ねなく接してくれる。

とはいえ、暗くなると流石に心配される。そろそろ帰ろう、とリミアが髪を手櫛で整え、後ろに振り向く。

すると、そこに人が倒れているのが見えた。

リミアは驚き、思わず腰から鉄扇を抜く。

ここに来た時にはいなかったし、今の今まで人の気配などしなかったからだ。

しばらく待ってみても倒れている者が動く気配はない。

リミアはゆっくりと近寄ってみる。

グレーのリクルートスーツを身に纏っていることと短髪の髪から倒れているのは男のように思える。

髪の色はリミアと同じ金色のようだが、どこか不自然な色だ。染料で染めているか、脱色しているかのどちらかだろう。

「あの…もしもし？」

このままでは埒があかない。

そう判断したリミアは男に恐る恐る近づき声をかける。

だが、男は何の反応も示さない。

リミアは更に近づき、鉄扇をひっくり返して、柄の部分で背中をつついてみる。

すると、男は微かに呻いた。どうやら生きてはいるらしい。

「あの…大丈夫ですか？しっかりしてください」

どうやら意識を失っているようだ、と判断したリミアは警戒心を解き、男の背中を両手で軽く揺する。

これで起きなければ、仰向けにして外傷を調べてみよう、と思いながら。

だが、揺すり始めてから数分。

男は寝苦しそうに何度か呻いた後、

「…後、五分待てよ、要」

と呟いた。

言葉の意味は理解できなかったが、どうやら意識を取り戻しかけているようだ。

「大丈夫ですか！？しっかり気を持って下さい！」

リミアが更に声のトーンを上げながら、揺するのを強くすると、
「…あん？」

異変に気がついたのか、男は両手を地について立ち上がり、リミアの方へ顔を向ける。

「…が、外人の女の子？」

男は不思議なものを見る表情でリミアを見る。

「よかった…無事だったんですね」

リミアはほっとした表情で男に言った。

彼の話している言語の意味は分からないが、どうやら無事であるようだし、刺客等でもなさそうだ。

「あー…あいきゃんとすぴーくいんぐりっしゅ…でよかったか？」

男は困った表情でリミアに言う。リミアはそれに首を傾げるばかりだ。

一方リミアも、古代語や東方語やエルフ語、ドワーフ語等の知りうる限りの言語を切り替えて話しかけてみるが、男はまるで理解しているように見えない。

どうやらお互い言葉が全く通じないようだ。
どうしたものか、二人は少しの間頭を抱えた。これでは自己紹

介さえない。

すると、男が自身の方を指差したり等、顔の高さで手を様々に動かして見せる。

リミアはそれを見た事があった。

確か母のエルマイアが耳の聞こえない姪とコミュニケーションを計る際に用いていた手話というものだ。

リミアもそれがある程度教わっており、手話が出来る者同士ならある程度の意志疎通ができるようになっていた。

細部は違うようだが、大体の意味は理解できる。

「シンイチ」

やがて、男は自身を指差しながら、そう言った。

どうやらそれが彼の名前であるらしかった。

そして、ここがどこであるか、どうして自分はここにいるのか、を尋ねられた。

だが、リミアが地名を教えても新一は首を捻るばかりである。後者に関してはリミアがわかるはずもない。

新一が弱り果てている様子を見て、リミアはこう提案した。

『うちにしばらく滞在して、身の振り方を考えませんか？』

新一は最初は驚き、少しの間渋っていたが、他にどうしようもない事を理解し、着いて来る事にした。

これが異世界の男新一と、不遇の姫リミアの出会いであった。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか！！（12）

「あん時は大変だったな」

「そうですね」

新一とリミアはお互いの顔を見て微笑みを交わす。

あの後、リミアの屋敷に連れて行かれた新一は、空いていた一室を与えられ、リミアの館の客として迎えられた。

勿論、護衛の兵達や召し使い達からも相当反対を食らったらしいが、何とかお願いをして住まわせて貰えたらしい。

その後、リミアの館に挨拶に来たミーティアから表層思考を直接伝える短杖を貰い、かなりの意志疎通が可能になった。

そして、リミアからの交易共通語の指導が始まった。

リミアの指導がよかった事、交易共通語がそもそも覚えやすい言語であったこと、そして、新一が必死だった事が幸いし、僅か2ヶ月で片言な会話なら可能になった。

「でも、少し怖いな」

「何がです？」

苦笑交じりにつぶやいた新一の顔を覗き込みながらリミアが尋ねる。

「あまりこの世界で長くいたら、日本語を忘れてしまっんじゃないかって、な」

新一は交易共通語を覚えてからはほとんど日本語を話していない。もちろん、今はまだ日本語も喋れるし、自分だけが見るメモを書くときなどは日本語を使う。

だが、この世界にもっと長くいたら、使わない日本語を忘れてしまつかもしれない。

そうなったら、元の世界に返った時家族に何と言えいいのだろうか？

「…早く帰る方法が見つかるといいですね」

リミアは新一から顔を逸らし、僅かに表情を曇らせながらそう言った。

「まあ、な」

新一はそう言って、胸ポケットから煙草を一本取り出した。

正直、新一も早く帰る手段が見つかって欲しいとは思っている。だが、見つかったとしても自分は当分帰ることはないだろうとも思う。

新一はリミアの方を横目で見る。

命の恩人である不遇の姫君。

この少女が成人し、暗殺の危険に怯える事がなくなるまで、その身を守り続ける。それが新一が自分の責務だと思っている。

例えばエリオットと結婚し、政治的な後ろ盾を得るまで…

そんなことを考え、新一は思わず手に持っていた煙草を握り潰した。

リミアがエリオットと結婚することを考えると何故か不愉快な気分になる。

リミアとエリオットの結婚は彼女の置かれた境遇を考えれば、悪

い話ではない。それに、エリオットは別に悪い男ではない。むしろ、いい奴だと思う。

だが、それでも何故か気に入らない。頭では納得できても、感情が納得していない。そんな感じだ。

「…新一？」

急に不機嫌そうに表情を歪めた新一に、リミアはきょとんとして声をかける。

「…なんでもない」

リミアの言葉で我に返った新一は、少し気恥ずかしくなり顔を背け潰してしまった煙草を船縁から空へと投げ捨てる。

馬鹿なことを考えている、と新一は思う。

きっと、自分はリミアと妹として感情移入しすぎているのだろう。きっと、自分は要が誰かと結婚するということになったら、こんな風に不機嫌になるのだろう、と新一は考え、

「！」

頭の中に何かが閃いた。

新一はリミアの方へ向き、咄嗟に彼女の身体を抱き寄せる。

「し、新一！？」

リミアは微かに頬を染めながら、戸惑いの声をあげる。新一の唐突な行動が理解できなかったのだ。

だが、次の瞬間その意図を理解することになる。

ドス！

さっきまでリミアのいた場所に長さ1m程の矢が突き刺さっていた。それはほぼ垂直に突き刺さっており、上空から発射されたものであることを示唆していた。

「これは…」

首だけで振り返り、その矢を見たりミアが戸惑いの声をあげる。その矢はまず間違いなく人間によって放たれたものだ。

今襲ってきている脅威は、先日のような化け物によるものではない。同じ人間によるものだ。

「俺から離れるな！」

そんなリミアを自分の身体で覆い隠すように抱きしめながら、新一は頭上を見上げる。

その視線の先には、夕焼け空を背景に空に舞う10体程の騎馬兵の姿があった。

まるで豆粒のようにしか見えない高度にいるが、新一の恐るべき視力はそれがパオラの率いている騎士達と同じ、ヒポグリフに跨る騎士だということを捉えていた。

次の瞬間、風を切る音が聞こえ、もう一本の矢が新一に向かってくる。

ドス！

矢は狙いを違えず、新一の眉間に命中した。常人なら間違いなく

頭を貫通され死んでいるだろう。

だが、新一は上空の騎士達の想像を絶する化け物であった。

「…大した狙撃の腕だな」

新一は鉢金に刺さった矢を抜き取って不敵に笑う。

その先端には血の一滴もついていない。

新一の強靱な皮膚はマスコット銃の弾すら弾き返す。彼を狙撃で倒すならバリスタ等の攻城兵器が必要だろう。

「…だが、ここには俺がいるんだよ!!」

新一はそう言いながら、矢を右手に持って振りかぶり槍投げの要領で投げ返した。

矢は音に迫る速度で飛び、空気を裂きながら元の持ち主の方へと帰っていく。

次の瞬間、上空の騎士の一人が動きを止め、ヒポグリフから滑り落ちる。

新一の放った矢は見事騎士の胸を貫通したのだ。

「…当たるもんだな」

それを見た新一は苦笑して言った。投げた本人もまさか本当に当たるとは思っていなかったのだ。

だが、上空の騎士たちも黙ってはいなかった。

今度は全員が一斉に自身の胴体ほどもある大きさの弩を持ち、一斉に矢を番え始めた。

「マジかよ、畜生！」

それを見た新一が悪態をつく。

あの程度の弩であれば、新一に致命傷を負わせることはできない。せいぜい、普通の人間が小石をぶつけられた程度の痛みを感じるくらいだ。

だが、新一の身体だけでリミアを完全にカバーできるわけではない。万一、リミアに命中すれば彼女の命は危ない。

（なんとか姫を船内に逃がさないと…）

新一は船室の扉へと目を向ける。

距離はさほどないが、矢の雨が降り注ぐ後1秒弱で入り込むには少し遠い。

だが、いずれにしてもこのままでは危険に晒され続ける。

新一はリミアを抱き上げ、扉の方へと走る。

次の瞬間、騎士たちが弩のトリガーを引き、矢が放たれる。

数本の矢が新一の背中に迫る。

だが、その矢は唐突に巻き起こった旋風に吹き散らされ、彼の身体に届くことはなかった。

「…なんだ!？」

唐突に起こった不可解な現象に、新一は足を止め周囲を見渡す。

「…ミサイル・ガードの魔法？」

先ほどの現象に魔力の働きを感じたりミアはそう呟く。

風を操る魔法、風術の代表的な防性魔法である。

「大丈夫ですか？」

声とともに前方の扉が開き、中から一人の人物が姿を現す。
ベージュのダッフルコートを身に纏う新一より遥かに小柄な少年、
エリオットであった。

「エリオット、来てくれたんですね！！」

その姿を認め、リミアが歓喜の声をあげる。

エリオットは優れた風術の使い手である。先ほどのミサイルガードも間違いなく彼の手によるものだろう。

「来るのおせえよ」

新一は微かに口の端で笑いながら、悪態をつく。
もちろん、本心でそう思っているわけではない。むしろ、よく察知して来てくれた、と思う。

リミアを守るのは独力でも何とかできただろうが、反撃する手段がなければ追い払うことはできないのだ。エリオットがいれば矢を恐れることもない。リミアの魔法等で反撃することも可能になる。

「すみません」

新一の言葉を聞いたエリオットは軽く笑ってそう言い、コートの左の袖に右手を差し入れる。

「遅れた分は働きの返しますよ」

そう言って手を抜いたエリオットは頭上から矢の雨を降らせる騎士達に目を向ける。

その手には刃渡り40cm程の艶消しの黒で塗られた幅広のナイフが握られていた。

エリオットは胸の前まで引き寄せた右腕を外に払うように振り、ナイフを投擲する。

その速度は新一の投げた矢と比べると遥かに遅い。重力に逆らって上空の騎士達にまで到達することもできない程の力しかない。

だが、ナイフは徐々に速度を上げていく。

ナイフに纏わりついた風がナイフに力を与えているのだ。

やがて、新一の投げた矢をも超える速度にまで達したナイフは、まるで自らに意思があるように曲線を描いて飛び、吸い込まれるように騎士に向かっていく。

そして、彼の纏う鱗鎧では防御しきれていない首筋に突き刺さる。その際、ナイフが回転し傷口から空気が入りこむ。

騎士は声をあげることすらなく絶命し、ヒポグリフの上から滑り落ちる。

他の騎士達は次の矢を番え、発射する。

だが、エリオットの展開した風の護りによって吹き散らされる。形勢は完全に逆転した。

一方的に攻撃される側となった騎士達は、投げられたエリオットのナイフを受け人数を減らしていく。

「…やるじゃねえか」

ひゅう、と口笛を吹いて新一はエリオットに賞賛の言葉を送る。

その顔立ちはすっかり一人前の戦士のようにであった。

半年前の戦う事など知らなかった病弱な少年とは全然違う。

「新一さんのおかげですよ」

そんな新一の方を見て、エリオットは笑う。

ナイフ投げの技術の基礎を教わり、トレーニング方法を教わったのもそうだが、何より彼の存在自体がエリオットを強くした。

パオラと互角に戦う新一の姿が、『自分もあんなふうに強くなりたい』という欲求をエリオットに持たせたのだ。

「さて、逃げてくれればいいんですけど…」

エリオットは攻撃の手を止め、上空の騎士達の姿を見ながら言う。既に数の半ばを失い、攻撃の手を封じられた彼らは状況の不利を悟ってるだろう。普通に考えれば、撤退を選択肢に入れるはずだ。

これ以上の戦いは無意味である。そして、エリオットも新一も無意味な人死に出すのは趣味ではない。できれば早く引いて欲しいと思っていた。

その願いが通じたのか、騎士達は反転し、その場から去ろうと動き出す。

それを見た3人は安堵のため息をつく。その正体が不明なのは心残りだが、分かったところでどうしようもない。この件の黒幕は大体見当がついているのだ。

だが、次の瞬間安堵は消え去った。

空に唐突に青白い光が走ったのだ。

それは超高電圧の雷であった。

雷に飲まれた騎士達は消し炭のようになり、ヒポグリフもろとも消え去った。

「なんだ!？」

突然の事態に新一は我が目を疑った。

あれはどう考えても自然な雷ではない。

魔法か何かかと思えないが、この空にいるのは今は新一達だけだ。そして、その誰にもあんな真似はできない。

次の瞬間、唐突に周囲が日陰になった。

上空に現れた巨大なものに日光が遮られたのだ。

「…嘘だろ？」

新一はそれを見上げ、絶句する。

それは巨大な角と爪と鱗を持つモノ。蝙蝠のような皮膜の翼を広げて空を飛ぶ恐竜のような姿は、パオラの駆るシリウスに似ていた。だが、大きさが違う。まるで深い海のような青い鱗を持つその竜はどう見ても黒い燕号よりも大きい。シリウスが赤ん坊だとすれば、こちらは堂々の成体であろう。

それは、テレビゲームなどでよく見かけたドラゴンそのものの姿。この世界でも最強とされる生き物であった。

第3章 てめえの都合なんざ知ったことか!! (13)

「スマウグ…」

上空の竜の姿を見て、リミアは呟くように言った。
その顔色は蒼白であり、竜の事を恐れている様分かる。

「知っているのか、姫？」

今にも膝から崩れ落ちそうなりミアの身体を支え、新一が尋ねる。

「…10年前、アヴァロンを襲った悪竜です。まさか、生きていたなんて」

エリオットは竜を睨み付けながら新一に竜の簡単な説明をする。
その表情は戦慄に染められており、額には汗を浮かべている。

「…そいつは厄介だな」

新一は苦々しい表情で呟いた。

アヴァロンを襲った悪竜ということは、どう考えても敵ということである。

まさか、改心してお友達になりに来たわけではないだろう。

今の状況であれに襲われれば、対抗することはまず不可能だ。

この船の3分の1程の大きさのある前脚の一撃でも、下手をすればこの船より長い尾による一撃でも船を破壊できるだろう。

第3章 てめえの都合なんぞ知ったことか!! (13) (後書き)

まだ途中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6447x/>

Chaos Soldier - 人修羅物語 -

2011年12月18日12時44分発行